
星の剣舞姫

たかいわ勇樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の剣舞姫

【Nコード】

N3412Q

【作者名】

たかいわ勇樹

【あらすじ】

時は1970年代のフランス。

物心ついた時から霊が見え、迷える魂に天国への道を示す方法を求めて聖職者の道に入った神父、ローラン・ボードワン。

ある日彼が教会で出会った1人の少女。後にその夜空に輝く星の光のようにまばゆく、宇宙を疾る流星の炎のように激しい生き様、天上の舞のように流麗で鋭利な剣技から、人は彼女を“星の剣舞姫^{けんまいき}”と呼んだ――

所々で隠し味を効かせつつも、シリアスなゴシックファンタジー

を目指しています。

プロローグ

世の多くの人々は私、ローラン・ボードワンを、いかなる逆境に於いても決して揺るがない神への信仰心と、人類の救いを真剣に願う慈愛、そのために行動し継続する行動力と意志を併せ持つ高徳の聖職者と讃える。しかし私が自分をそのように思ったことはただの一度もない。

私は高貴な家の生まれでもなければ、イエス・キリストのような神秘的な伝説を持って生まれてきたわけでもなく（他に表現が思いつかなかったから仕方ないが、キリストと私自身を比較することさえ傲慢ではあるまいか）、賞賛を浴びるに値する天賦の才を備えているわけでもない。私はただ、たった一つの、それも周囲の人はまづ持つことがない悩みを幼い時から抱え、それから解放される手段を探し求めた末に聖職者の道を選び、欲するものを探すためと、選んだ道に伴う責任を果たすために必要な努力を長い年月を掛けて地道に重ね、それでもなお今以て悩みを完全には解決できていない、おおむね平凡な男に過ぎない。

パリ市内の病院に勤務する外科医であった父は、仕事の都合上主日のミサに出られないことがしばしばだったし、母は毎週主日のミサやその他重要な行事のために私と兄を教会へ連れて行ったが、実情は医者妻として果たす付き合いの枠を出なかった。

私自身と言えば、勉強はトップクラスとはいかないが中の上から滑り落ちることはない程度にできて、スポーツは苦手ではないが学校の友人達とのサッカーに積極的に参加するよりは、室内でじっくり本を読んでいる方が好きな、どこのクラスにも一人はいるような内向的な少年として育った。それでもデュマの『三銃士』や『モンテ・クリスト伯』に心を躍らせる、年齢相応の冒険心も持ち合わせていたが。

そんな私が聖職者を志したそもその理由は何かと訊かれたら、

私はいつも「いつ目の前に道に迷った魂が現れても、天国への道を示せるようにです」と答えている。ほとんどの人は私の回答を、司牧への熱意と使命感から来るものと思っっているようだが、生憎ながらそのような大層なものではない。何しろ言葉の綾や言い回しなどではなく、本当に死んでもなお天に召されず地上をさまよっている魂が見えるのだから。

部屋や道の片隅に立っている人の姿が見えるのだけれど、他の人に話してもそんな人はいないと言われる。物心ついた時から私にはそんなことが度々あって、何度も親や学校の先生に注意されたり時には叱られたりした。そんな不可思議な体験を繰り返して八歳になる頃、どうやら私には他の人には見えない人間の魂——いわゆる霊が見えるらしいということに気付いた。

もちろん周りの大人のほとんどはそんなことを信じてくれるはずがなく、殊に職業柄非科学的なことに批判的だった父からは、「霊がいるなんて思うから、何でもない影や模様が霊に見えるんだ」などと叱られた。しかし、ただの影や模様が、私が見ていることに気付いて近づくだろうか？

彼ら霊の多くは、自分の存在に気付いてくれる人がいると構って欲しいのか、それとも自分が召天できない原因を解決して欲しいのか、理由はともかくまとわりついてくる傾向にある。だが私には霊を見ることはできるがそれだけで、霊が何か言ってきたり聞き取れることはできず、触ろうとしても霊は私の体をすり抜けてしまう。そういうわけで時間の長短の違いこそあれ、意思の伝達ができないと分かれれば霊は最終的には私から離れていくのだが、まとわりついている間はうつとうしくて仕方がなかった。

けれどそんな霊達も、教会では流石に神への畏れからか、はたまに聖堂内の荘厳な雰囲気被打たれてか、一様におとなしくしていた。なので、主日のミサなどで教会にいる間は私にとって一時ではあるが霊達から解放される安らぎの時間だった。私はできるだけ

長い時間教会にいられるよう、聖歌隊に参加し、侍者を務めるなど、教会の活動に積極的に参加した。

この侍者というのは、ミサなどの典礼で祭壇や、典礼で使うパンや葡萄酒、祭器や祭服を準備し、典礼の時には神父の祈りに受け答えをしたり、特定の箇所でベルを鳴らしたりして神父の手伝いをするのが役割で、ミサ答えとも呼ばれている。私が少年だった頃のローマ・カトリックの典礼は世界中どここの教会でもラテン語で捧げられることになっていて、当然侍者の受け答えもラテン語で行わなくてはならず、私も最初はそれらを丸暗記するだけだったが、意味が分からないなりにできるだけ美しく聞こえるよう一生懸命発音を練習して、神父に気に入られようとしたものだ。

私が少年時代通っていた教会には責任者である主任司祭と、それを補佐する助任司祭の他にもう一人、ジャック・イノー神父という年老いた司祭が住んでいた。イノー神父は長年に渡って司牧活動に従事して、既に一線を退いていたが、体が動く限り神と教会と信徒のために尽くしたいと希望して、信徒の告解を聞いたり、洗礼式や結婚式を司式したりと、老いてなお精力的に聖職者としての勤めを果たしていた。

あれは私が一〇歳だった年の六月、燦々たる日差しの下で木々が葉を繁らせ色とりどりに花が咲き誇る、一年で最も心地よい時期のある午後のことだった。

その日も私はミサの侍者を務め、日曜学校が終わって他の子供達ที่บ้านに帰った後も、私は聖堂内で一人信徒席に座って祭壇を眺めていた。とは言っても人並み外れて信仰心が篤かったからではなく、ただ外に出て霊にまわりつかれるのが嫌だったから、夕方になるまで教会で時間を潰すのが、当時私の休日の習慣だったのだ。

祭壇や、そこに飾られた十字架の細工を見るのも飽きて、今度は壁に掛けられた、キリストが十字架に掛けられるまでの道のりを表す『十字架の道行』と呼ばれる一四枚のレリーフを順繰りに見ようとしたら、イノー神父が入ってきた。ミサはとっくに終わっている

のに何の用だろうと思っていたら、神父は私の方へ歩いてきた。当時イノー神父とは疎遠ではないにしても、特別に親しいわけでもなく、司祭と侍者の関係を出ることは無かったから、困惑の度は一層増した。

「やあローラン」

しきりに考えていた私に静かな声で、イノー神父は声を掛けてきた。

「何ですか？」

私はそう尋ねた。愛想のない尋ね方とは思ったが、他に尋ねようがなかったので仕方なかった。だが神父は気にする様子も見せずに言った。

「うむ、まだ子供なのに親のしつけなどではなく自分から足繁く教会に通うなんて珍しいと前から思ってたね。他の神父達も侍者の務めなどを実に熱心に務めていると褒めていたよ」

「それはどうも」

「私もこの歳まで長いこと生きて、神と教会に仕えてきたなりに多少は人を見る目が備わっているつもりだ。確かに君は侍者やその他、何かにつけてよく働いてくれている。けど、それが純粋な信仰心によるものにはどうしても見えない。何か他に理由があって、教会に来るための口実として働いているようにしか見えないのだよ。もしそういう理由があったとしたら、私に話してくれないか？」

神父の口調は普段と変わらない穏やかなものだったが、私を見つめる視線はいつになく真剣で、口先だけのごまかしは全て見抜かれそうだったので、私は自分の中にある真実を、簡潔に答えた。

「霊が見えて、まとわりついてくるけど、教会の中ではそうならずに済むからです」

言った途端、私は『ああしまった』と思った。どうせ父や他の大人達と同様、信じてくれるはずがない。下手をしたら今後侍者の仕事などができなくなるだけでなく、教会へ通うのにも支障が出るかもと不安に駆られていたら、神父は僧衣カッツの懷から聖書を取り出し、

私にその上に手を置くよう促した。私は言われるままにすると、神父はミサの祈りの如く厳かに尋ねた。

「ローラン、今言ったことは神に誓って本当だね？」

私は即座に答えた。

「はい、本当です」

それを聞いて、神父は満足げに頷いた。

「よろしい、では信じよう。けどこのことは、君がここへ来る理由も含めて二人だけの秘密だ。いいね」

「分かりました」

私がそう約束すると、神父は頷いて去って行った。両親さえ信じられなかった私の悩みを真面目に聞いてくれて、なおかつ信じてくれたことが、私はとても嬉しかった。

このことがあって以来、私はこれまで以上に教会の手伝いを意欲的に務め、特にイノー神父には自分から率先して手伝いを申し出るなどして、神父もそんな私のことを実の孫のように可愛がってくれたものだった。私と神父は、年齢こそ離れていたが、信頼とも友情とも取れる、ある意味実の家族以上に結ばれていたと思う。

しかし、そんな満ち足りた関係も僅かな間だけだった。

ちょうど私が小学校を卒業する頃、神父は病に倒れ、もはや回復は絶望的であることを、大人達は明言こそしなかったが、言葉の端々、声の調子や表情から察することができた。

神父が亡くなる三日前、神父の強い希望ということで私は神父が入院する病院に呼び出された。私自身も神父が生きているうちにもう一度会いたかったので病室に行くと、神父は私以外の見舞い客や医者に退室を願った。そうして二人きりになると、病で痩せ衰えながらもなお力を失ってない目で私を見つめ、弱々しくもしっかりした口調で尋ねた。

「ローラン。まだ、霊は見えるかい？」

私ははいと答えると、神父は頷き、一呼吸置いて話し始めた。

「私は長い年月を聖職者としての務めに捧げてきた。その間、多く

の人と出会ってきたが、貧困、病、他にも色々な原因で苦しむ人は少なくなかったし、亡くなる時も、心残りが無いというのは本当に稀で、家族やその他に未練を残しているのをたくさん見てきた。君が見えるという霊は、多分そういう人達の魂なのだろう」

神父は疲れたのか一旦言葉を切り、一呼吸置いて続けた。

「私が聖職者への道を選んだのは、私自身の希望もあったからだ、それだけでなく、神の側から私を召し出そうとする意志を感じたからだ。カトリックではこれを召命と呼んでいるが、これがなくてはどんなに人間の側が強く希望しても、聖職者になることはできないとされている。

君が霊を見ることができるというのも、単なる偶然ではなく、神が目的を持ってそうされたのかも知れない。そしてそれが、君に対する召命なのかも知れない」

「聖職者!？」

それまで私は目の前のことで精一杯で、将来を漠然としか考えてなかった。だからいきなりそんなことを言われたら、困惑するなど言う方が無理だろう。

「まあ、それが召命かどうか、私が断言することはできない。判断できるのは君自身しかない。ただ、今のまま避け続けていては、霊の未練は晴れないし、君の悩みも根本的に解決はすまい。しかし、逆に考えれば、霊が見えるなら、迷える魂に天国への道を示すことだってできるだろう。

だが、そのためには生きている人間に天国への道を示すのと同じくらいか、もしくはそれ以上に高度な術を身に付けなくてはなるまい。そのためには、神学を修め、聖職者になるのも一つの方法だということだ。何、心配することはない。もし本当に君のその能力が神からの召命であるならば、途中いくら悩むことがあっても、最終的に君は聖職へ進むことだろう。逆もまた然りだ。

ともあれ、君が将来どんな道を進むことになっても、信仰だけは大切にして欲しい。そこに聖書があるだろう?」

私がサイドボードに置いてあった革張りの本を取って、神父に渡そうとすると、神父は首を横に振る。

「君にあげよう。形見に受け取って欲しい」

思いもしなかったことに、私は目を丸くした。当時は平信徒が聖職者の指導なく聖書を読むのは、誤った解釈を引き起こす原因になるという考えから、推奨されざる行為とされていて、ましてまだ一歳の子供に聖書を譲るなど、普通ではあり得ないことだったからだ。おかげで神父の話が終わって他の大人が病室に戻って来た時や、家に帰った時など、説明するのが大変だった。

こうしてその日、イノー神父によって、聖職者への道が、子供だった私の前に示された。もちろん私が最終的にその道を選ぶまでにはいくつもの紆余曲折があったわけだが、至って平凡なことばかりで聞いても面白くないだろうからここでは話さないでおく。ただ、その間も侍者の務めはイノー神父が亡くなった後も続けていたし、小学校を卒業後に進学した中等教育前期課程^{コレージュ}では古典語の授業で神学を学ぶのに欠かせないラテン語とギリシャ語を勉強するなど、相変わらず教会との関わりは続いていた。

そんなわけで、私が中等教育後期課程^{リセ}を卒業し、大学入学資格試験^アにも合格して神学校への進学を希望した時、周りの人達の反応はおおむね「やはりそうするか」というものだった。この頃になると、動機を訊かれたら、始めにも言った通り「いつ目の前に道に迷った魂が現れても、天国への道を示せるようにです」と、曲がりなりにも神に仕えることを志した身で嘘をつくなどのもつての外だが、言葉を選ぶくらいはできるようになっていた。家を継ぐ立場でなかったのも幸いして、私の希望は特にこれと言った障害もなく容れられ、私は黒い僧衣を身に付け、神学校で司祭になるための勉強を始めることになった。

一九六二年、時のローマ教皇ヨハネ二三世によって第二ヴァチカン公会議が開催された。教会の『現代化』をテーマにおよそ一世紀

ぶりに開催された公会議は、全世界から枢機卿、司教、大修道院長といった議決権を持つ公会議教父達や、顧問を務める神学者、更にはカトリック以外の教派の代表者までもがオブザーバーとして招かれ、参加者二千人以上という、史上空前の規模となった。

会議では典礼、教会論、聖書と啓示、司教のあり方についてなど多岐に渡る議案が討議され、変革を嫌う動きは教皇庁の高官を中心としてあったが、世界各国の教会で司牧に携わる聖職者とそれらに後押しされた司教達の変革を望む動きはそれ以上に大きく、激動する世界に教会はどう対応するべきか、どれを変えるべきか、反対にどれを変えずに残すべきか、活発な議論が交わされた。無論一神学生に過ぎなかった私が公会議に関わることなどなかったが、教会が一つの時代の節目にさしかかっていることを肌で感じ取り、勉学の合間や食事の席で学友達との話題に乗せることもしばしばだった。

公会議は合間に数ヶ月の間隔を置きながら四回の会期に分けて続けられ、残念ながらヨハネ二三世は第一会期の終了後、公会議の終わりを見ることなくこの世を去ったが、次に教皇に選出されたパウロ六世が会議を引き継ぎ、一九六五年、公会議は終了した。会議中や閉会后に成立した教令などによって、教会では多くの変革が為されたが、最も目立った変化はミサを始めとする典礼においてだろう。先程も話したが、かつては典礼は世界のどこでもラテン語で行い、ラテン語が分からない信徒は意味も分からずに拝聴するだけだったが、公会議後は現地の言葉で行われるようになり、多くの信徒が理解できるようになった。また、司祭は壁際に置かれた祭壇に向かって、すなわち信徒に背中を向けてミサを挙げていたが、公会議後は信徒の方を向いてミサを挙げるようになり、祭壇もそのために作り替えられた。

劇的な変化に、典礼の普遍性が失われると反対した者も少なからずいたが、大多数の聖職者、信徒はこうした変革を受け入れた。無論私も後者の一人だ。そもそもカトリックの教義や典礼の形式は、キリストが地上で福音を伝えていた頃から全く変わることなく伝え

られてきたわけではなく、時代毎に教義を検討、解釈することを幾度も繰り返して今日まで至っているのだ。教義や典礼は人々の救いのためにあるのであって、教義や典礼そのもののためにあるのではないことを忘れてはならない。

いささか話が逸れてしまったが、私が勉学に励んでいた頃のカトリックはそうした情勢にあったわけだ。

さて、私自身はと言えば、生家を離れての寮生活にもすぐに慣れ、神学校で神学と哲学の勉強に没頭した。何故神学と同時に哲学も学ぶのかと疑問に思う人もいるだろう。哲学と言えば、さして詳しくない人でもすぐに思い浮かぶことだろうソクラテスやプラトンを始め、キリスト教が興る遙か昔から多くの人によって論じられてきた上に、抽象的な題材が多くて説明するのが難しいが、敢えて要約するならば、この世界のあらゆる概念、現象の根拠を徹底的に掘り下げ、究極的な根源を理論的に探ろうとする学問である。従って他のあらゆる自然科学、人文科学でも、ある程度以上深く追求していくと哲学との関わりは避けて通れず、神学もその例外ではない。もちろん方法的に哲学と同一の部分はあっても、神学は神の存在が前提であるが。

難しい話になってしまい恐縮だが、ともかく霊を昇天させるための術を求めて、私は一心不乱に古今の教父や神学者達の学説を吸収しようとした。ここまで来ればおおよそ察しは付くだろうが、当時の私にとって、神学校での勉強は霊が見えることと、そのせいで霊にまとわりつかれる悩みを解決する方法を見つけ出すのが第一の目的で、聖職者になって司牧のために働くのは副次的な義務でしかなかった。

ところが、朝は他の学友達よりも早く起き、夜は寮の消灯時間があるもののギリギリまで本とノートに齧り付き、休日さえも時間を惜しんで勉学に費やす私の姿が、神学校の教師達には篤い信仰に裏打ちされた向学心によるものと映ったようだ。神学校を卒業間近、

私は突然校長室に呼び出されると、司牧の意志が勉学ほどにないのを見抜かれたのだろうかと思つて緊張する私に、校長は告げた。

「教区では神学校の卒業生から特に選抜した者を、より一層の勉学と研究のためローマへ留学生として送ることになっている。ローラン・ボードワン、ローマへ行く気はないか？」

突然降つて沸いたような話に、私は驚きと戸惑いを隠せなかった。同時に、私よりも明確に司牧への使命感を抱いている同期の神学生がいるにも関わらず、彼らを差し置いて聖職者としてのエリートコースとも言ふべきローマへの留学生に選ばれたことに、罪悪感さえ覚えた。しかし、神学校で学んだ知識の中に、迷える霊を確実に救ふことができる答えが見つからず、より深い知識を得ることができないだろうローマへの留学には抗いがたい魅力があった。数秒間の逡巡の後、私はこの話を受けることに決めた。

カトリックの総本山ヴァチカンを擁し、教師、学生ともに世界中から選び抜かれた俊英が集められたローマでの学業は祖国よりも厳しかったが、同時に大変素晴らしいものだった。それまでの霊を祓う術を探す目的に加えて、フランスを代表して送られた以上、期待に応えなければという義務感も生まれた。目的と手段が入れ替わっている感はあるものの聖職者を目指す以上、死者の霊の問題にかまけて生きている人間のことをなおざりにすることは許されないことだった。更にはローマで学業と思索の日々を送るうち、生きている人間に天国への道を示すことと死者の霊に天国への道を示すことは同一線上にあるのではと考えるようになり、それが一層勉学への励みになった。そうした努力が認められ、私はローマの大学で学位を取得し、司祭に叙階された。

司祭叙階式の日のことは今でも良く覚えている。福音の朗読と聖歌の後、一人ずつ名を呼ばれた私達受階者は叙階式を司式する司教の前に進み出る。司教は私達の指導を担当してきた司祭に、私達が本当に司祭にふさわしいかどうかを問い、司祭が肯定の証言をする。

それから私達は席に戻って司教の訓話の後、再び司教の前に出る。司教が私達に司祭の務めを受け入れ、果たすかどうか、いくつかの質問をすると、私達はその度肯定し宣誓を行う。

それら一連の質問の締めくくりに、司教はこう尋ねる。

「あなたは、私達のためにご自分を清い捧げものとして御父に捧げた大祭司キリストに日ごとに固く結ばれ、キリストとともに自分自身を、人々の救いのために神に捧げますか？」

そして私達は答える。

「はい、神の助けによって捧げます」
すると司教は次の言葉で結ぶ。

「あなたのうちに、よいわざを始めてくださった神ご自身が、それを完成してくださいように」

それから私達受階者は自分を全面的にキリストに捧げる証として床に伏す。他の参列者一同は起立して、神の恵みを求めて諸聖人の連願を歌う。

主よ、あわれみたまえ 主よ、あわれみたまえ

キリスト、あわれみたまえ キリスト、あわれみたまえ

主よ、あわれみたまえ 主よ、あわれみたまえ

神の母聖マリア われらのために祈りたまえ

聖ミカエル われらのために祈りたまえ

聖なる神の使い われらのために祈りたまえ

洗礼者聖ヨハネ われらのために祈りたまえ

神とキリスト、聖人達への祈りはなおも続き、その間私も参列者達と同じく懸命に祈り続ける。

連願が終わると、起き上がりまた司教の前に進み出てひざまずく。司教は無言で私達一人一人の頭の上に手を置き、使徒の時代からと同じように、聖霊が私達に降りてくるようにと神に願う。この按手と呼ばれる動作を、列席する司祭全ても同じように行い、続いて司

教が叙階の祈りを唱える。

祈りが終わると、叙階された私達新司祭は司祭の祭服を着せられる。これは物質的に説明するならばただ服を着替えただけに過ぎないだろうが、私には生まれてきてから自分の魂に羽織ってきたあらゆる物を脱ぎ捨て、新しい別の存在になったような気がして、司祭になることが終点ではなく通過点でしかないことに改めて気付かされたのだった。

こうして晴れて司祭となってフランスに帰国した私に、教会の長上は神学者として更なる研究の道に就くことを期待していたようだった。だが、私は神学校や大学の教職への誘いを全て辞退し、教会で司牧の現場に立つことを希望した。古今の文献に目を通し、分析し、独自の解釈を見出す神学者を否定するわけではないが、学問のための学問、研究のための研究の日々を送るよりも、司牧の現場で実際に多くの人達と向き合うことで、地上の人々の魂を救いへ導く方法を探していきたいと、当時の私は思っていたのだった。

私はパリ市内の教会に助任司祭として配属され、司牧活動が始まった。主任司祭を手伝ってミサを挙げ、信徒の告解を聞き、他にも信徒の青少年関係の仕事を任されたので洗礼式や結婚式、宗教教育も私の役目になった。仕事は大変な量で、しかも何一つおろそかにできないものばかりだったので、毎日夜も明けない早朝や深夜まで起きて準備に費やし、なおかつ日々の祈りと両立させるには大変な労苦を必要とした。しかし少年の頃に見た、イノー神父が老いをものともせず己の命を燃やすようにして司牧に取り組んできた姿は、私にとってまたとない模範となって私を支えてくれた。また、仕事を通した信徒達との触れ合いは、私にとって大きな喜びとなり、同時に地上の人々を救いへ導く方法を探す道でもあった。

そうした生活が四年ほど続いた後、今度はパリ郊外にある教会の主任司祭を命じられた。先の教会と比べれば小さいながらも、教会を一つ任されるのである。責任の重さと更なる労苦を思うと、不安

を抱かなかったと言えは嘘になるが、それを上回る期待と熱意に後押しされ、新しい司牧の場へと向かった。そしてその教会で、私はイノー神父に次いで、その後の人生を決める運命的な出会いをすることになる。

あの、夜空に輝く星の光のようにまばゆく、宇宙を疾る流星の炎のように激しく生きた、“星の剣舞姫”^{けんまいぎ}に――

「主イエスは渡される夜、パンを取り、あなたに感謝を捧げて祝福し、割って、弟子に与えて仰せになりました。

『皆、これを取って食べなさい。これはあなたがたのために渡される私の体である』」

私は祭壇上の皿から取ったパンを掲げ、会衆に見せる。

それからパンを皿に戻し、次いで祭壇から杯を取ると、同じように掲げて見せる。

「食事の終わりに同じように杯を取り、あなたに感謝を捧げて祝福し、弟子に与えて仰せになりました。

『皆、これを受けて飲みなさい。これは私の血の杯、あなた方と多くの人のために流されて罪の赦しとなる、新しい契約の血である。

これを私の記念として行いなさい』」

主イエス・キリストが弟子達と囲んだ最後の晩餐を記念するために、私達聖職者は日々ミサを挙げる。今はそのミサの中で最も重要と言える、聖変化のくだりに入っていた。これによって、ただのパンと葡萄酒は聖体と聖血、つまりキリストの体と血に変化するのだ。もちろん外観や科学的組成は変わらず、昔から批判はあり、これからもなくなることはあるまい。しかし、概念としては確かに変化するのであり、この聖変化がミサからなくなることもないだろう。

ミサが進むと聖体拝領に入る。並んでやって来る信徒達一人一人に対し、私は「キリストの体」と唱え、「アーメン」と答える信徒に、聖体となったパンを配るのだ。

並ぶ人達のほとんどは町の住人達。かつては“教会の長女”と呼ばれていたフランスも、昨今は若い世代を中心とした教会離れが問題になっているが、当時はまだ多くの住人がミサに集まってきたものだ。他に旅行者などが混ざることもあったが、パリの郊外と言っても取り立てて著名な観光名所もない町だったから、商用で来た者

か、あとは徒歩やヒッチハイクの途中で立ち寄る者などが一人か二人、時たま来る程度だった。

そんな所に見知らぬ東洋人の少女が親子連れでもなくやって来れば、目立つなと言う方が無理だろう。

年はせいぜい一〇から一二、三歳といったところ。腰まで届く長い黒髪に黒い瞳、東洋人の割には白い肌をした小柄な少女だ。身に纏っている黒いドレスもたくさんのレースやフリルで飾られており、この服装も違った意味で他の参列者から浮いていた。

流石に親子連れでないとは言っても一人ではなく、大人の男と一緒にだったが、これもまた普通ではなかった。

身の丈は他の大人と比べても頭一つ飛び抜けていて、それに比例して肩幅も広いがっしりとした体格を黒のスーツとアスコットタイで固めた姿。これだけでも十分目立つというのに、更に驚くべきは、彼が東洋人ではなくどこから見てもヨーロッパ系の顔立ちで、それが従者か執事の如く彼女に付き従っているということだった。

人種的に東洋人が西洋人に劣る、などという考え方は毛頭無いが、当時はまだ東洋人が西洋人に仕えることはあっても、その逆はあり得ないという考えがステレオタイプとして未だ根強く残っていたから、体の大きさの差も相まって二人の取り合わせはとても異様に見えた。

やがて聖体拝領を終えてミサは閉祭となり、私は僧衣の上に着ていた祭服を脱いで、ミサの後も残る信徒達としばらく会話する。例の二人も町の人達からどこから来たのか、何の用かなどと訊かれていたが、男の方は礼儀正しく相手しながら質問の答えについてははぐらかしていたのに対し、少女の方は相手をするのも面倒らしく、隅の方で男が話を終えるのを待っていた。だが、待ちきれなかったらしく男の側へ歩いて行くと男の背中を無言でつねった。

「いつまで話してるのロベール。さっさと戻るわよ」

痛さに振り向く男に、少女はそう言ってさっさと歩いて行く。

「申し訳ありませんアニェス様、只今参ります」

ロベールと呼ばれた男は文句も言わず、去っていく少女の後へついて行った。

そして二人の姿が見えなくなると、人々の話題は彼らのことになる。

「一体何なんだろうね、あの二人は？」

「男の方はロベールと言ってたからフランス人なんでしょうけど、問題は女の子の方よね」

「アニエス様とフランス語の名前で呼ばれてたけど、あれはどう見たって東洋人だぞ」

「その割には綺麗なフランス語だったから、この国在住なのかも知れないな」

「となると中国人の可能性が一番高いな」

「でも中国人だったらパリの中華街から離れて何でこんな所まで来たのかしら？」

「さあなあ」

何しろ情報が少ないからろくに推測もできず、話は次第に別の話題へ移っていった。

町の人達が帰って昼食を済ませると、私は聖堂の側に建つ司祭館で事務仕事をする。

赴任後一ヶ月ほど務めて、私はこの教会の現状——信徒達の信仰心、暮らし向きや、教会を取り巻く聖俗様々な問題などがおおよそ把握できていた。内にも外にも大小様々な問題があったけれど、最大の問題は午前もミサを挙げた聖堂にあった。

十八世紀後半に建てられた石造りの聖堂は大ききこそパリのノートル・ダム大聖堂には遠く及ばないが、空へ向けて高く張り出されたりブ・ヴォールト様式の天井や整然と立ち並ぶ柱、色鮮やかな窓のステンドグラス、派手さこそないが緻密な細工の施された祭壇などが織り成す調和が当時のゴシック・リヴァイバルの特徴を色濃く残し、神の家としてふさわしい荘厳、壮麗な佇まいを形成していた。

しかし、百年にも渡る年月は確実に建物全体を老朽化させており、今は所々で壁の漆喰のひび割れや石材の痛みが現れている程度だが、早いうちに全体的な修復工事が必要なのは明らかだった。とは言えそのためには金が、それも教会の予算からすれば膨大な金額が必要で、無論ミサなどの度に修復のための献金を求めているが、帳簿に記入された金額を見て、私はつい溜め息をついてしまう。私より前の歴代主任司祭もこの問題に頭を悩ませながら、遂に解決することができず、己の無力を噛み締めながら後任に後を託していったのだった。

修道生活や聖痕で知られるアッシジの聖フランチェスコが、崩壊寸前だったサン・ダミアノ聖堂を再建するために自ら一つ一つ石を積み上げていったように、この聖堂の修復も一步一步着実に実現へ向けて努力しなければならぬとは分かっていたが、それでも一日も早く費用を集め、修復させたいと思うのは、聖職者とは言えまだ三〇そこそこの若者にとってごく当たり前の野心だろう。

しばし私の意識は未だ実現の目処が立たない聖堂修復の未来図に飛んでいたが、玄関から聞こえる呼び鈴の音で唐突に現実に取り戻される。

「はい、今行きます」

私は思考を中断して玄関に向かう。来客の予定はないし、何か届け物だろうかと思いつきながらドアを開けると、一人の若い女性が立っていた。

年の頃は十代後半から二〇代と言ったところ。均整の取れた身体を女性的ながらも動きやすそうな服装に包んで、ショートカットにした金髪が更に活動的な印象を与える。見覚えがないから、この町の人ではなさそうだった。

「こんにちは。ここの教会の神父さんですか？」

女性は私の僧衣姿を見て、そう挨拶をしてくる。

「はい、私がここで主任司祭を務めるローラン・ボードワンですが、あなたは？」

「申し遅れました。私、エミリー・ベレッタと申します。実は神父さんにお願いがあって参りました」

「お願いですか？」

怪訝そうに私は尋ねた。金やコネ、地位の類があるわけでもない、しがない教会勤めの神父である私にわざわざ何を頼みに来たというのか？　ともあれ立ち話も何だから、中で詳しく話を聞こうと思い、私はベレッタと名乗ったその女性を中に招き入れた。

「どうぞ」

私はベレッタを応接室に案内すると、二人分コーヒーを入れて私と彼女、それぞれの前に置く。

「ありがとうございます」

ベレッタはコーヒークップを取って一口すすると、話を切り出した。

「実は、お願いというのはこちらで所蔵している本のことなんです」「本、ですか？」

「はい。私はこの国のキリスト教史を研究してまして、こちらで所蔵している本を是非調べさせていただきたいんです」

彼女の言葉に引っかかるものがあつたので、私は気になって尋ねる。

「そういうことなら、言っただけですがこんな小さな教会よりも、パリの図書館や国立古文書館の方が史料は充実しているでしょう？」

「いいえ。私が見たい史料はそういう所にあるのとは違うんです」

彼女は首を横に振る。

「私は実際に司牧の現場で働いていた聖職者による記録が見たいんです。こちらの教会では代々の神父が書いた日誌が、かなり古い時代から保管されていると伺ってます」

彼女の答えに、私はようやく納得がいった。

「なるほど。確かに代々の神父による日誌が書庫に仕舞ってありますけど、今の聖堂に建て替わる前のもあるそうですから数百年分もあつて、調べるとしたら膨大な量になりますよ」

「何日かかっても構いません。ご迷惑はおかけしませんから」

「しかし……」

そう私が洩るのは予想していたらしく、ベレッタは服のポケットから小切手を取り出して私の前に突き出した。

「ささやかな額ですが、教会の運営費などにお使い下さい」

彼女は平然と言ったが、小切手に書かれていた額面は、ささやかと言うにはあまりにも多すぎた。

「そう言われましても、こう言っただけでは何ですがあなたのような若い女性が気軽に出すような金額では……」

「ご心配なく。両親が十分な遺産を残してくれましたから。それに、これは神父さんではなく教会に、つまり神様にお出しするお金なんです。それを神父さんが断るいわれはないはずですよ」

「むう……」

ベレッタの理屈と押しの強さに、私は押し黙るしかなかった。一九七〇年代以降、フランスで起こったフェミニズム運動も当時は広まる途上だった中、彼女のような女性は私にとって初めて見るタイプだった。誤解の無いように言っておくが、私は彼女に男としての欲望は誓って抱いてない。ただ、彼女の積極的で果敢な行動が、学問に対する情熱に裏打ちされたものと感じ、好感を抱いたことは否定しない。その時は本当にそう思い、疑わなかったのだ。

そして、彼女から受け取った小切手が、聖堂修復の実現に向けて大きく前進させてくれると思うと、献金という名目の、最後の一押しだと分かっているにも、若かった私は受け取らずにいらなかった。それが私を『常識』の外へ誘う切符になるとも知らずに――

次の日から、ベレッタが教会へ通ってくる毎日が始まった。

平日は朝早く、泊まっている宿屋から教会へやって来ると朝のミサに参列。ミサが終わると朝から開いている近くの食堂で朝食を済ませ、それから司祭館の書庫で歴代司祭の日誌と格闘。昼食を挟んで調べ物を続け、日が暮れると宿屋に帰る繰り返しの日。あまりに古い日誌だとフランス語でなくラテン語で書かれていたりするので読めないのではないかと心配だったが、初日手が空いた時に書庫へ様子を見に行ったら、彼女は何の苦もなくそうした古い記録を読みこなしていた。

聞いてみたら、ラテン語に古典ラテン語、ギリシャ語といった古典で使われる言語だけでなく、英語、イタリア語、アラビア語にヘブライ語、他にも様々な言語の読み書き、会話ができるそうで、少年時代にラテン語とギリシャ語、神学生時代にイタリア語、それとヘブライ語を少々学んだ程度の私とはまさしく別次元だった。更には各国の歴史、文化、民俗にも造詣が深く、カトリック、プロテスタントを始めとするキリスト教諸教派、その他世界中の様々な宗教について広く深い知識を持っていた。

ベレッタが特に関心を持っていたのは、キリスト教初期の他宗教との関係——キリスト教が派生する元となったユダヤ教を始め、当時盛んだったミトラ教、その他布教地の土着信仰などがキリスト教の教義や祭礼にどう影響したか、または逆にどう影響を与えたかだった。キリスト教が布教の過程でミトラ教などの密議宗教や土着信仰の教義を取り入れていったと言って驚く人もいると思うが、一般にキリストの誕生日とされているクリスマスは、ミトラ教の冬至の祭りがキリスト教に取り入れられたと考えられているし、ヴェネツィアやリオデジャネイロなどで毎年盛大に開催されている謝肉祭^{カーニバル}も、古代ゲルマン人の春の到来を喜ぶ祭りがキリスト教の中に入っ

て今の形になったと言われているなど、幾つも例があるのだ。

「他にも中南米ではカトリックの布教に当たって、キリスト教をその土地に馴染ませる手段として、先住民が自分達の宗教儀礼を通してキリストを信仰するのを宣教師達が認めたおかげで、今でも向こうの祭礼に土着の宗教儀礼の要素が残ってたりするんです。他にもメキシコシティの大聖堂のように、土着の宗教の神殿だった場所にキリスト教の教会を建てたりすることもありましたし」

そう説明したところで彼女はハツとなって、「すみません、このくらいのことは神父さんでもご存じですよね」とぼつの悪そうな表情で言うので、

「いやいや、なかなか興味深い話でしたよ」

そう私も笑って返したのだった。

さて、ベレッタが書庫で記録の海と格闘していたのと同じ頃、彼女が初めて訪れたのと同じ日にやって来た少女と大男——アニェスとロベールの二人連れも、あれから町に留まって、主日が訪れる度ミサに姿を現していた。

ロベールはその威圧的な体格の割に穏やかな性格で町の人達とすっかり顔なじみになり、ミサの前や閉祭後、参列者の話の輪に加わるようになっていたが、対照的にアニェスは子供にありがちな無邪気さがないと言うか、大人びた所があって、同じ年頃の子供達との話や遊びの輪に入ろうとしない。それでいて背伸びしているようにも見えず、むしろ自然な振る舞いであるようにさえ感じられるのだ。しかも二人とも、自分達の素性やこの街に來た目的についてはほとんど明かそうとしなかった。

「あの二人、天気の良い日は朝から晩まで町中を歩き回ってるんだけど、観光してるようには見えないんだよ」

「そうそう、何か探し物でもしてるみたいに時々立ち止まってはキョロキョロ周りを見回したりして」

「私が見た時には、磁石みたいな針が付いた板を持ってたけど、何

か調べてたのかしら？」

「大体、女の子とお付きだけで、他に親とか家族はいないのかしら？」

「さあ？ 訊いてもまともに答えてくれないんだよね」

町の人達でこんな調子だから、仕方なく私が直接問いただすことにした。別に探偵や警察の代わりを気取ったわけではない。あくまで聖職者として、町の人達の不安の種を取り除く助けになればと思つてのことだ。

「こんにちは、アニエス、ロベール」

ある土曜日の午後、川べりで一休みしている二人を見つけて私は声を掛けた。

「これは神父様、こんにちは」

丁寧に挨拶を返すロベールとは対照的に、

「あら神父、変わった所で会うわね」

神父は教会とセットとでも思つてるような口調でアニエスが言うてくる。

「神父と言っても人間ですからね。用事で外出することだってありますよ」

まあ私はその程度のことと腹を立てるほど人格が未成熟ではないつもりだったから、冷静に答える。

「すみません神父様、アニエス様が失礼なことを言つて……」

加えてロベールがペコペコと頭を下げて謝ってくるので、私もそれ以上の追及はしないつもりだったが、

「ロベール、やたらと人に謝るんじゃないといつも言ってるでしょう？」

「あたっ！」

アニエスが言いながらロベールの足を蹴ると、彼は蹴られた箇所をさすりながら、

「ですがアニエス様、相手が神父様なんですから……」

「神父だから何？　神父なら例え向こうが全面的に悪くてもこちらが謝らなくちゃいけないの？」

「そんな極論を言ってる訳じゃなくて、敬意とか礼儀とか、とにかく失礼なことしたら謝らなくちゃいけないでしょう？」

「ロベールが些細なことでもすぐ謝り過ぎなのよ！」

「ちよつとアニエス、いくら何でも言い過ぎではありませんか？」

二人の言い争い（と言うか、アニエスが一方的にロベールを責めているのだが）に、私も黙っているわけにはいかなくて止めに入りが、

「口を挟まないで。これは私とロベールの問題なんだから」

「ですが、いくら使用人に対してとは言え、そこまで酷く言わなくても良いんじゃないありませんか？」

「使用人？　ハッ！」

アニエスは何を言ってるのという表情で、姿勢を低くしているロベールのみぞおちを殴りつける。

「こいつはそんな上等なものじゃないわよ。分かりやすく言えば、奴隷とは言わないにしても下僕よ、下僕」

頑丈そうな体付きとは言え急所は効いたらしくむせ返るロベールを示しながら、アニエスはそう断言した。

「下僕って、いくら何でもそんな扱いはあんまりだ——」

「良いのです、神父様」

流石に私も手をこまねいているわけにはいかず言い返そうとした所で、そのロベールに遮られる。

「申し訳ありませんアニエス様、出過ぎたことを申しました。これは神父様ではなくアニエス様に謝っているのですから良いんですよ？」

「何馬鹿な質問してるのよロベール。相手が私だからと言う以前に、私に無礼を働いたんだから謝るのが当然でしょ」

今度は下げてきたロベールの頭を殴るアニエス。

「ほら、頭を下げたまま固まってないで、そろそろ行くわよ」

「は、はいっ！」

そう言ってスタスタと歩き出すアニェスに、慌ててロベールがついて行く。そんな二人の後ろ姿を私は呆然と見ていたが、すっかり遠くへ行ってしまった所で、私は彼女達の素性を訊きそびれたことに気付くのだった――

「神父さん、浮かない顔をしていますけど、どうしました？」

教会に戻って、ベレッタに声を掛けに書庫に入ると、彼女にそう尋ねられた。

私が外でのアニェス達との経緯を話すと、ベレッタは少し考えて言った。

「もしかしたらあの二人、泥棒かも知れませんよ」

「泥棒って、そんな――」

私は否定しようとするが、

「考えてもみて下さい。こう言っては何ですけど、特に観光名所の類もないこの町で、私のような、ここにある記録が目的で毎日通っているのならともかく、何日もずっと滞在して、町中を歩き回っているなんて、どう見たって怪しいじゃないですか。町中回って金目の物がありそうな家を物色したり、逃走経路を確保したりして、盗みの計画を立ててるんじゃないやありませんか？」

ベレッタの言葉は推測の域を出なかったが、あの二人のここ数日に渡る行動の理由としてかなりの説得力を持っていた。そのため私の心も危うく傾きかけるが、

「いや、君の言うことも確かに一理あるが、証拠がない以上断定はできない。そういうことを調べたり、断定するのは警察の仕事だ。我々のすることじゃない」

彼女よりも自分自身に言い聞かせるように、私は言った。私はなおも言い返そうとする彼女に先んじて言葉を続け、

「君が今言ったことは、私の胸にしまっておくから、君もこのことを他の誰にも言うべきではないと思う。いいね？」

そう言って、私はこの話題を半ば強引に終わらせると、彼女も不承不承ながら「分かりました」と答え、日誌の解説に戻る。

それから私も書庫を出て、しばらくの間細々とした仕事に掛かっていたが、突然書庫の方から「あっ!」という声が聞こえてくる。

「どうしました!？」

私は慌てて書庫へ駆け込む。

「ああ、神父さん。ほら、見て下さいここの記述」

ベレッタは椅子から立ち上がって日誌のページを凝視していたが、私に気付くとページの一箇所を指さしてくる。

「これは今建ってる聖堂の、一つ前の聖堂が建てられた時代に書かれた日誌なんですけど、その聖堂を建てるに当たって以前の聖堂を取り壊したら、床の下からガリア時代——つまりキリスト教が広まる前の土着信仰の祭祀場の跡が見つかったとあるんです!」

確かにベレッタが指さした箇所を見ると、おおむね彼女が言う通りのことがラテン語で書き記されていた。

「つまりこれは、当時この地域の住民をキリスト教へ教化する際、土着の信仰を吸収、征服するため祭祀場の上に教会を建てたということですよ!」

喜々として話すベレッタ。その後も彼女は「当時の教会の大きさから考えて、祭祀場の置かれた正確な位置は……」などと独りごちながら日誌と格闘を続け、私も我がことのように嬉しい気分で書庫を出て自分の仕事に戻るのだった。

その夜、いつものように夕食を済ませてからしばしの間本を読み、就寝前の祈りを済ませるとベッドに入ったが、何故か普段よりも早く目が覚めてしまい、目を閉じてても全く眠れそうになかったので仕方なくベッドから出る。

時計を見るとまだ午前三時を回ったばかりで、当然まだ夜も明けてない。私は僧衣に着替え、普段の起床時間までの間聖書を読もうと考えながら眼鏡を掛けると、隣の部屋から微かに物音が聞こえて

くる。司祭館の手伝いをしてきている家政婦が来るのはもつと後の時間だし、そもそもこんな時間にこそそと入ってくることで自体が怪しい。

私は極力音を立てないように注意しながらドアを開けると、足音を忍ばせて寝室を出る。廊下を見ると、隣の部屋のドアは開け放たれており、先程聞こえた音が私の空耳ではなかったことがはっきりした。私はそっと開いている入口から部屋を覗くと、明かりの付いてない部屋の中で書棚をあさっている人影を見つける。

「そこで何をしているんですか!？」

私は強い口調で尋ねながら部屋へ足を踏み入れると、右手を伸ばして壁を手探りし、電灯のスイッチを入れる。

電灯が付いて部屋が明るくなると、書棚をあさっていた人影がはつきり照らし出される。動きやすさを重視した感じの黒い服に身を包み、頭には黒い帽子を被った全身黒づくめの服装。書棚をあさっていたこともあって、明らかに泥棒が目的で入ってきたのだと私は確信する。それで昨日の昼間、ベレッタからの忠告が頭をよぎる。だがアニェスにしては背が高いし、ロベールにしては背も体格も小さかったから、あの二人の可能性は瞬時に消えた。

「こちらを向きなさい」

今思えば、泥棒に出くわした場合、他に執るべき手段があったのだろうが、その時の私には泥棒の正体が気になっていたので、顔を見せるよう指示したのだった。

だが、人影は口に手を遣ると指笛を鳴らし、何をする気かと思つた途端、いきなり後頭部に強い衝撃を受け、私は床に倒され昏倒する。意識が途切れる直前、私の視界に入ったのは、ようやく私の方を向いた人影、忌々しげにこちらを見るベレッタの顔だった――

「良いかね、まず最初に言っておく。昔から——それこそこの世に人類が現れた頃から、多くの人々によって数限りなく、存在するかもしれないかについて議論が為されてきたが、悪魔は間違いなく存在する。それは聖書に悪魔が出てくるからという教条的な理由ではなく、私自身の経験で、悪魔の存在を確認したからに他ならない」

顔や手に深く刻まれた皺のせいで実年齢以上に老けて見える初老の神父は、まず最初にそう言ってきた。

ローマでの留学中、私は過去に悪魔祓い^{エクソシズム}を幾度も経験したというのは目的こそ違うが、何らかの手がかりを見出すことはできるかも知れないと思い、教えを請うたのだった。

「君は悪魔という存在についてどれだけ認識しているかな？ 奴らは聖書に出てくるソドムとゴモラのような穢れきった場所で、思いつくだけの罪を犯した人間を相手にすると、君は思っているのではないかね？」

「そうではないのですか？」

「全く違う」

神父は首を横に振って続ける。

「始めから穢れている場所、既に罪に塗れた人間、そういったものに悪魔は興味を持たないのだよ。考えてもみたまえ、例えばだ、放っておいても十分な利益を生み続けると分かっている場所に留まって、働き手を叱咤するなどで能率アップを図っても、たいして利益が伸びるとは思えないだろう？」

「まあ、確かにそうですねですけど、穢れと商売を同じように説明するのはどうでしょうか？」

「物事は聞く側にとって身近なことに例えた方が理解しやすいのだよ。聖書でもキリストは教えを説く際に、例えば話をよく使っている

だろう？」

「そうですね、失礼しました」

神父の心遣いに気付かなかったことに、私は素直に詫びる。

「話を続けようか。ともかく、悪魔というのはむしろ、神聖な場所に好んで現れ、信仰篤き者を誘惑しようと試みる。清らかなものを穢し、篤信者を墮落させるのが奴らの狙いだ。古くは荒野で彷徨うキリストをサタンが再三誘惑したようにね。だからこそ我々聖界に身を置く者は悪しき者とそうでない者とを見極め、悪しき者の手練手管に立ち向かう知恵と勇氣、そして揺るぎない信仰を持たなくてはならない」

「あなたのように、ですか？」

私の問いに、神父は渋面になる。

「私の積み重ねてきた知恵や信仰が、そこまで高みにあるとは思っていない。ただ私は、己が卑小な存在であることを常に自覚して、努力と信仰を積み重ねていき、これからそうしていくだけだ。君もこの先、自分の能力や信仰が人よりも高みにあるなどと思いつめることは決してあってはならない。そういう傲慢さに、悪魔は狡猾につけ込むのだからね」

決して忘れることがないように、心と記憶に刻みつけるように、静かだが力強い口調で神父は言った――

「……！」

昔の夢から戻った私の意識に最初に入ってきたのは、ザック、ザックと土を掘るような音だった。

目を開けてみると、先程も見たと同じ黒ずくめの、ただしもつと大柄なのが二人、ランタンの明かりを頼りにスコップで穴を掘っている。周りをよく見ると、そこは私がいつもミサを挙げている聖堂内だと気付く。床に手を付いて立ち上がろうしたが、両手が後ろで縛られていて、縄が両手に食い込む。

「くっ……」

痛みに思わず声を上げると、穴の側で作業を見ていたもう一人の黒ずくめが気付く。

「あら、もうお目覚め？」

言いながら歩み寄ってくる。

「こんなことをして、一体何が目的なんだ、ベレッタ？」

「『こんなこと』、とはどっちのことかしら？　今ここでやってること？　それともさっき司祭館に無断で入ったことかしら？」

ベレッタは私の目の前にしゃがみ込んで問い返す。

「どっちもだ」

「あっそ。いいわ、向こうの作業はまだもう少し掛かりそうだし、順を追って話してあげる」

昼間までの礼儀正しさをかなぐり捨て、物理的にも精神的にも上から目線でベレッタは言う。

「この教会が、キリスト教が広まる前の土着信仰の祭祀場の上に建てられたというのは、昼間も話したわよね。じゃあ、こうは考えなかった？　何でここに土着信仰の祭祀場があったのかって」

「君は知ってるのか？」

「もちろんよ。と言うより、知ってるから、当時の祭祀場の位置を探してたのよ」

「何のためだ？　遺跡発掘のためか？」

「馬鹿じゃないの？」

ベレッタは鼻で笑う。もちろん本気で言ったわけではない。もし遺跡を見つけるのが目的なら、正式な手続きを踏んで発掘調査すればいいのだから。

「当時の連中が何を拝もうが何しようが私の知ったことじゃないわ。私の目的は、祭祀場の跡にある物だけよ」

ベレッタの言葉で、私はようやく彼女の正体を理解した。

「そうか——君は盗掘のためにここへ来たのか！　目的は祭祀場で使われていた儀式の道具などか？」

話には聞いたことがあった。正当な権利なく遺跡など貴重な文化

財を掘り返し、発見した出土品を持ち去って金持ちの好事家に売り捌く輩がいると。かつては国家ぐるみで盗掘が行われたことさえあったという。

「半分当たりで半分外れよ。確かに私はここへお宝が目当てで来たけど、私が狙うお宝は儀式の道具とか、そんなチンケな物じゃないわ」

ベレッタがそう答えたところで、穴の方から固い物に当たったような音が聞こえてきた。

彼女は穴の側に戻って中を覗くと、

「それを掘り出してちょうだい！」

心なしか高ぶった声で、穴を掘っていた黒ずくめたちに命令する。ややあって、穴から大人一人分か、それ以上はありそうな大きさの岩が掘り出される。

ベレッタは逸る手で岩に付いている土を払うと、むき出しになった岩肌をいじり回していたが、

「間違いない——遂に見つけたわ！」

目を輝かせ、歓喜の叫びを上げた。

「そんな岩の何が価値があるんだ？」

当然のように疑問を口にする私に、ベレッタは無知な生徒に対する教師のようにやれやれという感じで溜め息をつく。

「ただの岩じゃないわ。これこそが、この場所に祭祀場が作られた理由なのよ」

目的の物を見つけ出したからか、彼女は高揚し、自慢げな声で答えた。

「これは遙かな昔——ケルト人の一部がゲルマン人の勢力に押されて今のフランスに移動してガリア人と呼ばれた頃か、それよりも前でしようから紀元前四世紀か、もっと前に宇宙からやって来ただろう隕石よ。当時の人々はこれが空から落ちてくるのを見て、神様が降りて来たとも思っ、この場所に祭祀場を造ったのね。これの本当の価値も知らずに」

ベレッタは隕石を撫でながら含み笑いを漏らす。

「本当の価値、と言うと、学問的な価値というやつか？」

私の問いに、ベレッタはまた鼻で笑った。

「話しても、神父さんにはきつと理解できないわ」

ベレッタは服のポケットから紙を一枚取り出す。ランタンの明かりで、それが以前彼女から貰って、ずっと仕舞ってあった小切手だと分かる。

「本当は神父さんが寝てる間にこっそり取り返して、隕石も一緒に戴いていく予定だったけど、見られたからには仕方ないわよね。P A001、その神父を殺しなさい」

ベレッタがそう命じると、黒ずくめの一人がやって来て、私の胴体に両腕を回し、絞るように締め上げてくる。

「グアア……！」

すさまじい腕力に、肺の空気が一気に押し出され、肋骨がきしむ音が体の中から聞こえてきた。あまりの激痛に意識を失いそうになるが、そこへ何者かの声が私の耳に入る。

『止めて……助けて……』

それはあまりに弱々しい、女性の声。それが何故、今私を殺そうとしている黒ずくめから聞こえているのか、苦痛の中で思っていると、聖堂の入口から勢いよく扉を開く音が聞こえた。

「あらっ？」

今繰り広げられている状況とは不釣り合いな声。私が必死で首を向けると、扉を開けたロベールの側にアニエスが、町の人が言っていた、磁石みたいな針が付いた板を手に立っていて、声は彼女が発したものだった。

「盤の針に強い反応が出たから、こんな深夜に来てみれば……わざわざ掘り出してくれてありがとう」

中の様子を見てもパニックの一片すら見せず、アニエスは状況を理解しているとは思えない発言を続ける。

「随分と余裕じゃない？ 見たところあなた達もこの隕石が目当て

のようだけど、自分達の身の危険も分からないのかしら？ まあ分かってても生かしておく気はないけどね。P A O O 2、その二人を殺しなさい！」

ベレッタの命令で、もう一人の黒ずくめが二人に襲いかかる。

「ロベール！」

「はいっ！」

アニエスの一言で、ロベールは主人の意図を瞬時に察して進み出ると、黒ずくめの前に立ちはだかり、黒ずくめが伸ばしてきた手を自分から取り、四つに組んで力比べを始める。ロベールも成人男性の平均を越える体格の持ち主だが、相手はそれよりも一回り大きく、一見勝ち目はないように思えたが、ロベールは押し負かされることなく、逆に押し返してさえている。

「そいつは任せるわよ」

アニエスは返事も待たずに私たちの方へ向かって足を進めると、ベレッタは止めようとするが、アニエスはまるで瞬間移動したように、気が付くと私と黒ずくめの側に来ていた。黒ずくめは相変わらずベレッタの命令を遂行し、私を締め上げることに専念していたが、不意にその頭がぐらりと傾き、地面に落ちる。

目の前で起こっているにも関わらず、いきなりのことに私は状況が飲み込めなかったが、次いで私を締め上げている腕が力を失い、私は地面に落とされる。

「痛たた……」

締められた箇所と、落ちた拍子に打った尻の痛みをこらえていると、黒ずくめの腕が両方とも切り落とされて床に転がっていた。

「ひっ!？」

思わず腰が引ける私の服の裾を、アニエスが掴む。

「動かないで」

いつの間にかアニエスの右手には一本の剣が握られていた。見たことのないデザインの柄に、七つの点とそれらを繋ぐ線が彫り込まれている、まっすぐな諸刃の剣身を持つそれを彼女は一振りして、

私の手を縛っていた縄を切る。そして私の服の前をはだけて黒ずくめに締められた箇所を触ると、アニエスは服の下から東洋の漢字らしき文字を書き連ねた一枚の紙片を取り出し、貼り付ける。すると不思議なことに、黒ずくめに締められた箇所や、先程殴られた後頭部などの痛みが嘘のように治まった。

「とりあえずこれで大丈夫ね」

アニエスはそう言うと、私から倒れている黒ずくめに視線を移す。

「ア、アニエス、いくら何でも腕や首を切り落とすなんて……」

ようやくまともな言葉を絞り出した私に、アニエスは何てことはないと言うように答える

「確かに凶体は大きいけど、首の繋ぎ目や関節を狙えば、切断するのは比較的簡単よ」

「そうじゃなくて、いきなり殺すなんて……」

「何よ、命を助けて貰っておいて、それはないんじゃない？ 大体、そいつの切り口とかをよく見なさいよ」

アニエスに言われて、私は黒ずくめの首や腕の切り口を見る。するとどういふ訳か血が一滴も流れていないことに気付く。

「うおおおおっ！！」

一方もう一体の黒ずくめも、ロベールによって地面に押し倒された末、両腕をへし折られ、頭を踏み碎かれるが、そちらも血を流さず、金属や木の残骸をさらしている。

「分かった？ そいつは人間じゃない。あの女に操られている人形よ」

アニエスは剣で指すと、ベレッタは怒りの形相でこちらを睨み付けてくる。

「人形だって？ 馬鹿な、糸とかで繋がってもいないのに、何で動く——」

私は言いかけて、黒ずくめの体から微かな光が上がるのを目にする。光は間もなく人間の姿を取るが、大柄で威圧的な黒ずくめとは全く似ても似つかぬ、年頃の若い女性のもので、それは私が小さい

頃から否応なく見てきた霊のそれだった。

『ありがとう、お嬢さん——』

霊はアニエスに礼を言っていると、そのまま溶けるように消えていった。何故霊が人形から出てきたのか、何故これまで姿が見えるだけだった霊の声が聞こえるようになったのか、未だ危ない状況にあるのは分かっているにも困惑する私に、アニエスが言ってくる。

「死者の魂を人形に縛り付けて、術者の思い通りに操る邪法ね。なら、魂は解放するには人形を破壊するのが一番手っ取り早い方法よ」

「魂を人形に！？ そんなことが——！？」

「信じられない？ でも目の前で現実起こってるんだから認めなさい、神父。それに、さっき貼った符のおかげで、あいつらから受けた痛みも治まったでしょう？」

「この紙のことか？」

「そうよ。それと神父、まだ気を抜いちゃ駄目よ。あの女、まだ切り札が残ってるみたいだから」

アニエスに言われてベレッタを見ると、彼女は服のポケットから金属製の小さな筒状の形をした笛を取り出して鋭く吹き鳴らす。それが合図だったらしく、聖堂の入口から、天井から、ぞろぞろと新たな黒ずくめの人影が現れる。今度は成人男性の平均程度の身長で、先程のと比べると力はなさそうだが、その分俊敏そうなイメージを与える。それが総勢一〇体以上。

「SA001からSA016、私以外の三人を、速やかに殺しなさい！」

どうやらこれらも人形らしい黒ずくめの集団は、両手の指の先から鋭い爪のような刃を出し、私とアニエス、ロベールを取り囲む。

「ロベール、私はこの神父を守らなくちゃいけないから、そっちは自分で何とかしなさい！」

ロベールから「かしこまりました！」と返事が来るのを確認すると、アニエスは剣を捧げるように水平に構え、左手の指で剣身に彫られた点と線をなぞりながら、私の知らない言葉で何かを唱え出す。

「貪狼、巨門、禄存、文曲、廉貞、武曲、破軍——天帝の守護北斗七星、我が剣に力を与え給え。我百邪を斬断し、万精を駆逐せん！」
唱え終わるや、剣身が青白い薄明かりを放ち始める。まるで剣に何か力が宿ったかのようなだとその時は思ったが、本当に力が宿っているとは思ひもなかった。

それと同時に、私達を取り囲んでいた人形達が一斉に襲いかかってくる。両手の鉤爪を振りかざしながら迫ってくるそれらを見て、いくらか戦闘能力はあるらしいアニエスとロベールでも、流石にこの数では相手をしきれまいと絶望的な思考に陥っていた私の視界で、アニエスが剣を手に向かっていく。

まず最も手近な一体に近付くと、アニエスはその胸を横に切り払う。前の大きなのは耐久力も劣るらしく、一体目がその一閃で致命的な傷を受けて倒れると、すぐ近くににいる他の人形に距離を詰め、それが振り下ろす鉤爪を剣で受け止める。そのまま力比べをするかと思いきや、アニエスは右足を踏み込むと同時に剣先を下に向けて鉤爪を受け流し、相手がつんのめった所を、回転するように背後から斬り倒す。

もちろん人形達はアニエスだけでなく私にも向かってくるが、アニエスは人形が私に迫ってくる度に、まるで最初から分かっていたかのようにやって来ては切り捨てていく。そのおかげか、少しばかり落ち着きを取り戻し、周りを注意して見てみると、アニエスは私を中心に回るように位置取り人形達と戦っている事に気付く。更に人形達と刃を交わす彼女の剣捌き、足運び、体のこなしは素人目にも一切の無駄がなく、最小限の動きで敵の攻撃を防ぎ、かわし、次々と敵を斬り伏せていくその様は、一つの洗練された舞を見ているかのようなだった。それらが私を中心に展開されているのを外から見たら、まるで私とアニエスが円舞曲ワルツを踊っているように表現できたかも知れない。気が付けば十数体いた人形達は、あらかたアニエスに斬られるか、ロベールに叩き壊されるかして、無残な残骸を床にさらしていた。

「はい、これで終わり」

最後の一体の首をはね、アニエスは舞を止める。数字で表せば数分にも満たなかったが、私には数十分、数時間にさえ感じられる、それほど緊迫して、濃密な時間、華麗にして精密な剣舞だった。

「さて、流石にあなたの人形も品切れでしょ。おとなしくその隕石を置いて去るなら見逃してあげる。今夜の私はとても機嫌が良いの」ベレッタに剣を向けながら、勝利を確信した口調でアニエスは言う。だがベレッタは後ずさりつつも、その表情に諦めの色は見られなかった。

「私のこと、随分甘く見てない？ お嬢ちゃん」

そう答えるや、ベレッタは腰の後ろに回していた右手を出し、次の瞬間火薬の破裂する音が聖堂内に響く。

「アニエス様！」

駆け寄ろうとするロベールを、アニエスは左手で制する。だが、彼女が右手に握っている剣は、剣身の根元近くから折れていた。

「本当の切り札ってのはね、最後の最後まで取っておくものよ」硝煙を上げる拳銃を手に、ベレッタが笑みを浮かべる。

「それとね、勝利を確信した時、最も隙ができるってことも覚えておくといいわ。次に活かす機会なんてないけどね」

ベレッタは銃口をロベールに向け、続けざまに二発発砲する。

「うぐっ——」

両足に一発ずつ弾丸を受け、ロベールは床に膝を突く。明らかに狙って撃ったもので、先程アニエスの剣を折ったのも偶然ではなさそうだ。だとしたら、ベレッタの射撃の技術は相当熟練したものと推測できた。

次いでベレッタは銃口をアニエスと私の方に向けるが、ベレッタがロベールを撃っている間にアニエスは折れた剣を捨て、代わりにスカートの下から刃渡り二〇センチほどの片刃の短剣を出していた。——私自身の名誉のために言っておくと、彼女はスカートの前をめぐって、足に鞘ごとくくりつけてあった短剣を抜いたが、後ろにい

た私にはスカートの中を見ることができなかったし、見る気もなかった。

「そんなチャチな刃物で何ができるって言うの？」

自分の優位を全く疑わない様子でベレッタが尋ねる。

「あなたを倒せる」

負け惜しみでも虚勢でもなく、確信に満ちた口調で、アニエスは答える。

「馬鹿じゃないの？ 刃物で銃に勝てるなんて本気で思ってるなら、今すぐ間違いだって学習させてあげるわ！」

ベレッタは拳銃の引き金を引く。胸か、それとも頭か、どちらにせよこの距離で撃たれたら、おそらくアニエスは無事では済むまい——銃声がした瞬間、私は一瞬のうちにそこまで考えていた。そんな凍り付いたように長い一瞬の後、私は床に血を流して倒れるアニエスの姿を想像していたが、現実の私の目の前にいるアニエスは、何もなかったように立っていた。

「えっ!？」

必中を確信した銃弾がかすりもしていないことに、ベレッタは信じられないという表情でアニエスを見る。周りを見ると、アニエスの側で、床石の一つが砕けていた。

「そんな馬鹿な！」

ベレッタは銃を連発する。だが、銃弾は全てアニエスが手にした短剣に弾かれ、見当違いの方向に飛んで行った。

「そんなことが——」

ベレッタは続けて銃の引き金を引くが、銃から乾いた音がして、弾切れを知らせる。慌てて弾丸を再装填しようとするベレッタだが、アニエスはその好機を見逃さず、滑るように間合いを詰め、短剣を一閃する。一拍遅れてベレッタの拳銃が、握っていた手首ごと床に落ちる。

「ひっ——」

鮮やかな断面を見せる切り口から噴き出す血を左手で必死に押さ

えながら、ベレッタは必死の表情で聖堂の外へ逃げようとする。だがアニエスはその首筋に刃を当て、ベレッタの動きを止める。

「さっきのあなたの言葉、そっくりそのまま返すわ。本当の切り札は最後の最後まで取っておくもの、それと、勝利を確信した時、最も隙ができるってね」

ベレッタへの皮肉をたっぷり込めて、アニエスがささやく。

「クッ……そんな刃物で、銃弾を何発も弾き返せるなんて……？」

歯噛みしつつ、ベレッタは折れるどころか刃こぼれも歪みも生じてない短剣の刃を見る。すると、彼女達の側にあった隕石と、短剣の刃が鼓動するように輝き出す。

「隕石と、共鳴している——？　もしかして、その短剣は！？」

まさかと言うように目を見開くベレッタに、

「ええ、この短剣も隕石から作った物よ。どうやら空から落ちる時、その隕石のほんの一部が欠けて、私の故郷に落ちたようね」

確信の笑みでアニエスが答える。

「そう、そう言うことなの……」

ベレッタは納得すると、フツと微笑み、唇を僅かに尖らせる。そして口笛を鋭く一吹きすると——

「うわっ！！」

突然私の側にあった人形の残骸の一つから爆発するように煙が吹き出す。あっという間に辺り一面視界が効かなくなり、幸いすぐに煙は晴れるが、既にベレッタの姿は聖堂から消えていた。

「これが本当に、最後の切り札だったってわけね——本当に用意周到なんだから！」

咳き込みながら、アニエスが悪態を吐く。

そうしているうちに、外はもう夜明けらしく、薄明かりがステンドグラスから差し込んでくる。それを合図のように、人形達の残骸から霊が現れ、口々に私達に礼を言いながら、光に溶け込むように消えていく。

次々と天に召されていく霊達を目に、自然と私の手はロザリオを

握り締め、口は天使祝詞アヴェ・マリアを唱えていた。

「めでたし聖寵充ち満てるマリア、主御身とともにまします。御身は女の内にて祝せられ、御胎内の御子イエズスも祝せられ給う。天主の御母聖マリア、罪人なる我らのために、今も臨終の時も祈り給え。アーメン——」

私が霊達のために祈っている頃、アニエスは撃たれたロベールの治療に掛かっていた。

治療と言っても、両足に食い込んだ弾丸を短剣でえぐり出すという乱暴なやり方で、ロベールも悲鳴を上げるが、アニエスは「騒ぐんじゃないわよ!」と強引に黙らせる。

「全く、あなたは馬鹿力と頑丈さが取り柄なんだから、あの女が拳銃を出してくると分かったらすぐ、体を張って私を守りなさいよ。なのにボーッと突っ立ってるから、七星剣は折られるし、こうして無駄な手間まで掛けさせるし……」

ひとしきり愚痴るアニエスだが、弾丸を取り出して、先程私を治療するのに使ったのと同じ符を傷口に張り付けると、フッと微笑んで立ち上がり、隕石に触れる。

「でもまあ許してあげるわ。この隕石があれば、また新しい剣が作れるし、それに——ねえ神父」

アニエスは祈りを終えていた私の方に近付いてくる。

「あなた、さっきから見た様子だと、霊が見えるみたいね? 専門的な修行をしたわけでもなさそうだし、生まれつき才能があるみたいね」

「才能?」

「そう。霊なるもの、霊なる力を感じ、霊なる力を行使して霊なるものに影響を及ぼす才能。霊の声が聞こえることに驚いてたのから察すると、中途半端に見ることしかできなかったのが、さっき霊を縛り付けられた人形に襲われて、上手くチューニングが合ったみたいね」

「そんな、ラジオじゃないんだから……」

「とにかく、全ては事実よ。夢でもインチキでも悪戯でもなくね。どうせ前から霊にまわりつかれたりしてきたんでしょ? ちな

みに悪霊とかの類はそういう才能のある魂が好みみたいでね、言っちゃ悪いけど、この先あなたはこれまで以上に霊がたくさんちよっかいを出してくるわよ」

可哀想にと言わんばかりにアニエスは意地の悪い口調で言ってくると、ここで言葉を句切り、そしてこう続けた。

「あなた、神の下僕辞めて、私の下僕になりなさい」

「は!？」

思いも掛けない言葉に間拔けな声を上げる私に、彼女は構わず続ける。

「世界を取り巻く霊なるもの、霊なる力の仕組み、感覚や力の使い方、悪霊、怪物から身を守る方法を教えてあげる。その代わり、私の下僕として働くのよ。悪い話じゃないでしょう?」

アニエスの言葉に、私は黙り込んでしまう。霊に対処する術は、私がずっと探し求めていたものだ。それが手を伸ばせばすぐ届く所にあるとなれば、心が揺れ動くのも当然だろう。だが――

「折角だが、私は自分自身を神に捧げると誓った身だ。君の下僕にはなれない」

断られるとは夢にも思っていなかったらしく、今度はアニエスが絶句する。彼女の申し出は本当に魅力的だった。もしもっと早く――少年の頃、イノー神父に会おうよりも先に彼女と出会っていれば、とも思ったが、すぐに無意味な仮定であると気付き、頭から打ち消した。

「そう、なら仕方ないわね」

少しの間黙り込んだ後、アニエスはそう返した。もっとしつこく誘ってくるかと思っていたのに、あっさり引き下がられて拍子抜けな感じがしたが、私の意志を理解してくれたのだと思い、私は心から安堵した。

その後はアニエスと、傷の癒えたロベールと三人で後始末に掛かった。人形の残骸を集め、穴に落としてはアニエスの符を使った術

で燃やして体積を減らし、全部終わると土を被せ、床石を乗せてその上に念のためビニールシートを敷く。

それらの作業を急いで終わらせると、隕石をロベールに持たせてアニェスは教会を去った。

「何だこのシートは？」

「今朝神父様が入ったら、床がへこんでいたそうだ」

「古い教会だからな。とうとうここも痛んできたか」

朝、ミサに集まって来た信者達に嘘を言うのは心が咎めたが、真実を言った所で信じて貰えるとも思えなかったし、無闇に不安をかき立てる必要もないだろう。だが皮肉にもこのことが、信者達に聖堂が老朽化している事実をはっきり認識させることになり、ミサで集まった献金の額がいつもよりも若干多かったのが不幸中の幸いと言うべきだろう。

「あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできない試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます——」

新約聖書コリント人への手紙第一、第一〇章一三節の言葉を、私は読み上げる。

そう、どれほど辛いものであっても、打ち勝つことのできない困難などないのだ。聖堂の修復も今回の件で後退する羽目になったが、また少しづつでも前進すればいいのだ。霊の相手も、キリストや過去の多くの聖人達がそうしてきたように、努力と信仰を積み重ね続けていけば、いつかそれらに対処する術も見出せることだろう。

私は聖書を閉じると、そう決意を新たに、眠気をこらえながら司祭館へ向かう。

「随分ごゆっくりね、神父」

司祭館へ入った私を、そう先入者が出迎える。

「ア、アニェス、何で君がここにいるんだ!？」

「何でって、用事があるからに決まってるでしょう」

そのまま応接室に行くと、アニエスは早々にソファに腰掛け、ロベールが用意したコーヒーと菓子に手を伸ばす。

「神父様もどうぞ」

ロベールに勧められ、アニエスの対面に座った私もコーヒーを一口する。

「台所にあった豆で煎れたのですが、お味はいかがでしょうか？」

「うん、私が煎れるよりも美味しい——って、そう言う話をしに来たんじゃないだろう？」

寝不足もあってか本題を急ぐ私に、アニエスが「ロベール、あれを」と言うと、ロベールが封筒を私に差し出す。

「これは？」

「転出証明書よ。私達二人、この町に家を借りて住むことにしたら、所属教会もここに移すわ。信者籍台帳に記入お願いね」

封筒を開けると、確かにカトリック教会が発行する、正式な転出証明書が二人分入っていた。

「でも、何でこの町に？ 私は君の下僕にはなれないと言っただろう？」

私の問いに、アニエスは悠然とコーヒーカップを傾けて答える。

「あの隕石から新しい剣を作るには、それなりに広さのある作業場が必要なのよ。それに、私はまだあなたのことを諦めたわけじゃない」

「それなら君の下僕にはなれないと何度も——」

「あなたは神の下僕を辞めることはできないから、私の下僕にはなれない。それで間違いないわね？」

私の言葉を遮り、アニエスがそう質問してくる。

「そうだが……」

「なら問題ないわ。別に神の下僕を辞めなくても、私の下僕はできるでしょ。歴史上、神の下僕でありながら国王の下僕もやって人間は何人もいるし。例えばリシュリューみたいに」

「恐れながらアニエス様、それはいささか例えがよろしくないの

は……」

そう口を挟んでくるロベールに、「うるさいわね」と当たるが、すぐに機嫌を直して私の方に向き直る。

「悪い話じゃないでしょう？ あなたは神父の仕事が続けて構わないし、これから私があなたの才能の使い方、霊との対処の仕方とかを教えてあげるんだから。あの隕石、だいぶ大きいから私の剣を作っても、まだだいぶ余るから、そのうちあなた用の武器も作ってあげるわね」

もはや何の問題もないと言うように、一人で話を進めるアニエス。私が止めようと口を開きかけた所で、ロベールが不意に私の肩を叩くので振り向くと、ロベールは諦め顔で首を横に振った。どうやら彼女に目を付けられた時点で、私に拒否権はなかったようだった。

「そうそう、名前を言うのを忘れてたわね。そこの大きいのがロベール・コラフェイス、私はアニエス・紅^{ホン}。これからよろしくね、ローラン」

満足げな笑顔で、アニエスは言った。

こうして私はほとんど有無を言わさない形でアニエス・紅——後に“星の剣舞姫”の二つ名でフランスの裏社会において敬われ、畏れられる少女の仲間に取り込まれることになった。

この後、私は約束通り、彼女から霊との対処の仕方やその他多くのことを教わると同時に、数え切れないほどの生命の危機にも遭遇することになるのだが、それらについて語るのは、また後日のことにしよう。

アニエス・紅が町に居を構えてから、私の修行は始まったが、正直な話アニエスが直接教えてくれたことは極めて少なく、修行らしいことをした日数も短かった。

普通修行と聞けば、師から心構えなどを延々説明されたり、地味で単調な訓練を長い年月繰り返すのを想像するだろうが、当初の私の予想に反してアニエスはそういったことを話ししなければ指示もしなかった。

良く武術などの修行は山登りに例えられるが、大抵の人が想像する修行は事前に心構えなどを教えられ、体力を養い、十分な装備を調べてから時間を掛けて登るのに対し、アニエスは登る山を示したら、ろくに知識も与えず「さっさと登りなさい」と命令してきた。しかも頂上までの最短距離を一直線に、途中に険しい崖があらうと谷があらうとお構いなしで「さっさと進みなさい」と彼女は私の尻を叩いてきた。

おかげで修行が始まって一ヶ月も経たないうちに、私はアニエス曰く「まあそこそこ戦力になる」水準まで上がることができたが、実戦重視と言えば聞こえは良くても、実際の所は単に彼女が根気強く教えるのが面倒臭いから、必死で戦って強くななくては死んでしまう状況に追い込み続けて手っ取り早く自分の手足となって戦う手駒に仕立て上げようとしたのではないかと思えてならない。

当然そのために私が死にかけたことも両手の指では数え切れないが、皮肉なことにそのおかげで、神は乗り越えられない困難を与えることはないのだという聖書の言葉と、何より神の存在を信じずにはいられないのだ。

何しろ、神の恩寵でもなければ今こうして生きていることが、とてもではないが信じられない危険の数々が、あの時から私に襲いかかってきたのだから――

アニエスが住居とした家は、町外れに建つ漆喰壁の二階家で、ちよつとした屋敷と言つても良いほど上品な造りをしていた。元はパリの貿易商を営んでいた老夫婦が引退後の住まいとして建てたらしいが、老夫婦の死後何人かの手を渡り、空き家になっていたのをアニエスが借りて引越してきたようだった。

アニエスが私の教会に転出証明書を出してきた翌日の午後、私はアニエスに呼ばれて彼女の家を訪れた。

最後に見た時には長いこと空き家になっていたために雑草が伸び放題だったのに、僅か一日で芝生も植木も綺麗に刈り込まれていた。前庭を抜け、私は玄関のドアをノックすると、程なくしてドアが開いて黒のスーツ姿の大男が姿を現す。

「ようこそ、神父様」

大男——アニエスの従者であるロベール・コラフェイスは、恭しく一礼すると私を中へ招き入れる。

「確か長い間空き家だったから埃だらけだっただろうに、随分綺麗なものだね」

「取り急ぎ前庭と一階のみ掃除しました。まだ二階と裏庭が済んでませんし、荷物も全部解いたわけではございませんが」

そう答えるロベールに案内され、私は応接間に通される。

「アニエス様、ボードワン神父様が来られました」

華美すぎず、それでいて地味すぎず、内装と見事に調和した家具に囲まれた室内で、アニエスはレースとフリルで飾られた黒いドレス姿でソファアーに座っていた。

「来たわね、ローラン」

微笑みながら迎えるアニエスに促され、私は彼女の対面のソファアーに座る。

「今日から色々教えるわけだけど、まずその前に、あなたが霊が見える他にどれだけ能力があるか、どんな才能があるかを知りたいわ。それらを考慮して、どんな修行をしていくか決めるから」

いきなりアニエスはそう切り出してきた。

「私の能力ねえ——一応聖職者としての知識でラテン語とギリシャ語にヘブライ語を少々、あとイタリア語も日常会話は問題なくできるし」

「そんなことを訊いてるんじゃないわよ」

私がこれまで学んできたことを並べていると、途中でアニエスに遮られる。

「はつきり言ってあげる。私の修行にそんな物は意味ないから。意味があるのは——」

アニエスは言いながらテーブル上のティーセットに手を伸ばし、スプーンを取った次の瞬間、スプーンの先が私の喉元に当てられる。「こういうのよ。今のがスプーンじゃなくて刃物だったら、頸動脈を切られて殺されてる所よ」

身を乗り出し、私の喉にスプーンを突きつけてアニエスは言う。

いきなりの行為、早業に身動きが取れずにいる私に、アニエスは喉から私の顔にスプーンを向け、

「ついでに言うと、スプーンでも人間の目玉を抉り出すくらいはできるのよ。覚えておきなさい」

言いながら、私の左目の下をスプーンでピタピタと当てる。脅しでなく、ただ事実を伝えるように淡々とした口調で。

「反応速度は全然駄目ね」

ソファアに座り直し、アニエスは溜め息をつく。

「他も自己申告じゃ当てにならないし——脱ぎなさい」
「は？」

「聞こえなかったの？ 服を脱ぎなさいって言ってるのよ」

「何で服を脱がなきゃいけないんだ！？」

「いいから脱ぎなさいよ。ロベール！」

「はっ！」

アニエスに命じられたロベールが私の横にやってくると、

「失礼いたします」

そう言っ、私が制止する間もなく僧衣のボタンを次々と外していき、まるで食用葡萄の皮を取るようにあっという間に脱がされてしまう。

「お、おい……」

私がそう言いかけた時には、もうズボンもシャツも脱がされ、パ
ンツ一丁で立たされていた。

「一体何をする気なんだ？」

僅か数秒の早業に、私は困惑しつつも懸命に思考し言葉を捻り出
すが、

「まっすぐ立つ」

アニエスは無視して私にそう命じる。

「右腕を上げて」

「左腕も」

「右腕を下ろして」

「今度は真横に広げて。そのまま腰から上を捻る。はい反対」

「次は前にかがんで爪先を地面に付けて。……固いわね」

「戻して。次は足を広げて。膝を曲げて中腰の姿勢で」

こんな調子でアニエスは次々と命令してきて、私は雰囲気的に逆
らうことも文句を言うこともできずそれに従う。その際中、アニエ
スは周りをグルグル回りながら私の体をジロジロ見ていたが、

「うん、大体分かった。服着ていいわよ」

言っ、アニエスはソファァーに戻ると、ロベールが服を差し出し
てきたので着ると、それらはいつの間にやったのか、すっかりアイ
ロンが掛かっていた。

「筋肉を見た感じ、持久力はそこそこにあるみたいね。意外だわ」
「聖職者という仕事は体力が要るんだよ」

そう。他の多くの仕事と同様、聖職者の仕事は体力が要る。

日々のミサやその他様々な仕事はもちろん、カトリックに於いて最大の行事であるクリスマスと復活祭は、前日の夜から徹夜でミサを挙げるなどして、キリストの誕生と復活を祝うのだから、体力がなくては務まらない。

「でもそれだって、私が求める水準には届かないわ。瞬発力やパワーに至ってはお話にならないし」

予想通りとも期待外れとも取れる表情と口調で、アニエスはボデイーチェックの結果を述べる。

「時間もないし、少し手荒に行くわよ」

アニエスはソファを立つと、私に付いてくるよう促す。応接間を出ると、家の奥の方へ進む。一階の一番奥にある扉の前まで行くと、扉には漢字らしき文字が書かれた紙片――符で封印がしてあったが、アニエスは胸元で両手を組み、何事か唱えながら数回手の組み方を変え、最後に右手の人差し指と中指を封印に向けて、

「疾！」

そう小さく叫ぶと、符はハラリと剥がれ落ちる。

「入って」

符を拾い、扉を開けて入るアニエスに続いて私も部屋に入る。

「うわあ……」

部屋の中を見て、私は思わず声を上げた。

部屋に置かれているのは大きな炉、金床にハンマーと、まるで鍛冶屋の仕事場にあるような設備、道具が一揃い置かれており、いずれもすぐ作業に掛かれるようしつかり手入れがしてあった。

「どう、この部屋は？」

自慢げに胸を張りながら感想を尋ねるアニエスに、

「そうだね、女の子の部屋に置く家具にしては、いささか無骨な気がするけど……」

気の利いた答えが思い浮かばず、私はそう答えるのが精一杯だった。

「何その冗談？ 笑えないんだけど」

案の定、彼女は溜め息を吐き、最後に入ってきたロベールも苦い表情をする。

「ほら、あれが何だか分かる？」

アニエスは部屋の奥に鎮座する大きな岩を指さして尋ねる。

「ああ」

忘れようにも忘れられるものか。つい先日、私が殺される寸前まで追い込まれ、『常識』の外へ足を踏み入れるきっかけとなったのだから。

「教会の床下から掘り出した隕石とやらだろう。そう言えば、その隕石から新しい剣を作ると言ってたな？」

そこまで言って、私は納得した。どうやらこの部屋は剣を作るための作業場のようなのだ。

「そうよ。せっかく良い材料が手に入ったんだから、最高の剣を作りたいでしょ？　ロベール、そこに置いてあるやつ、全部持ってきて」

「かしこまりました」

ロベールが部屋の隅に置いてあった剣の束を持ってくると、アニエスはそれらをテーブルの上に並べ、一振りずつ鞘から抜いて剣身をチェックする。いずれも簡素な造りの鞘と柄に入っていたが、素人目に見ても見事な作りの剣身揃いで、さぞかし腕の立つ職人の手によるものと思わせた。

「これを作ったのは誰なんだい？」

思わず好奇心に駆られて尋ねると、アニエスはニヤリと口の端を吊り上げる。

「全て、アニエス様がお作りになられた習作です」

代わりにロベールが答えると、私は「何だって!？」と大声で叫ぶ。

アニエスにはこれまでに何度も驚かされたが、これほどの、売れば相応の高値が付くだろう剣を、こんな年端もいかない少女が作るとは、完全に私の常識の斜め上を行っていた。しかもこの出来で習

作だというのか。

「だって所詮は普通に手に入る鉄で作った物よ。西洋の剣の形を作るコツを掴むのが目的で、隕石で作る前の練習でしかないわ」

アニエスはあっさりと言いつつ、剣のチェックを続ける。

「ここはフランスだものね。『入郷随俗』、西洋では『ローマにいたる時は、ローマ人がするようにせよ』って言うんだっけ？ まあ西洋の剣のデザインが気に入ってるのもあるけど」

などと言いながら、一通り剣のチェックが終わると、アニエスはその中の一振りを私に差し出してくる。

「体格から考えると、あなたは力で押すよりも、速さ重視で戦う方が向いてそうだから、そのサーベルが良いわね。まずは抜き打ちで敵を斬れるレベルが目標かしら」

アニエスからサーベルを渡された私は、初めて持つ剣の重さに思わず取り落としそうになった。

「抜いてみなさい」

言われて私は柄を握り、鞘から抜く。緩やかに反った剣身は、電灯の光を受けて冷たく輝く。生まれて初めて純然たる武器を持った私の右腕に、物理的な重みと、他者を傷付けるための道具特有の雰囲気とも言える心理的な重みがのしかかる。

「なるべく早く、重さに慣れるようにしなさい」

重みに顔を歪める私にアニエスは言うが、この重み、特に心理的な重みに慣れきってはいけないと、私の心は警告を発していた。

この後も私は剣を握る度、常にその警告に心の耳を傾けるよう心掛けているが、これは私が聖職者だからと言うわけではない。剣が他者を傷付け、時には命をも奪う道具である重みと恐ろしさに慣れきって、斬ることに何の抵抗も持たなくなったら、それは人間を人間たらしめている大切なものを失うことになる。と知っているからだ。そして、例え慣れることがなかったとしても、剣を振るうことはどれだけ理屈を重ねても暴力であり、道に迷った魂に天国への道を示す目的とは遠い手段であることを、私は知っている。だが私はそう

と分かっていても、私自身の身を守るためと、より多くの魂を救うために剣を振るうアンビバレントに、未だ解答を得られていない。

「じゃあ行くわよ」

部屋を出るアニエスに、私は慌ててサーベルを鞘に収める。

「これから練習か？」

彼女の後ろに付いていきながら私は尋ねるが、

「何言ってるの。そんな悠長なことをするわけないでしょう？」

呆れた口調でアニエスは答える。

「剣身の材料として隕石は手に入ったけど、剣には他にも柄とか鞘とかあって、そっちも最高の材料を使いたいじゃない。炉にくべる石炭だって、一般の市場に出回っているような物じゃ隕石を加工するのに必要な火力を出せないから、探して来なきゃ。とにかくやることはたくさんあって、あなたの修行だけに時間を取るほど暇じゃないのよ。だから材料の調達と一緒にあなたの修行もやっちゃおうから」

ほとんどついで同然の扱いに不安を覚える私に、アニエスはこれまたついでのようにこう続けた。

「最悪死ぬかも知れないから、気をつけてね」

「それでは私は車を回して来ますので」

玄関を出ると、ロベールは部屋から持ってきた剣の束を抱えて先に門を出て行く。

「車で行くのか？ 明日の朝もミサがあるし、あまり遠くへ行くのはまずいんだが……」

そう不安を口にする私に、

「大丈夫よ、日が暮れるまでには帰ってこれるから。生きてればだけど」

さらりとアニエスが最後に付け足した部分に、私が覚えた不安を流石に感じ取ったようで、

「何不安がってるのよ？」

アニエスはやれやれと言う風に溜め息を吐く。

「君が不安を煽り立てるからだろう？」

流石に私もそう言い返すが、

「心外ね。私は注意を促すつもりで言ったのよ」

アニエスは唇を尖らせる。

「けど、『死ぬかも知れない』とか『生きてれば』とか言われたら、誰だって不安になるさ」

そう言っていると、門の前に小型トラックが止まる。

「お待たせいたしました。どうぞお乗り下さい」

巨体にはいささか窮屈そうな運転席から、ロベールが降りてくる。

「これに乗って行くのかい？」

白い車体で、後部の荷台には幌が被せられている、どこにでもありそうな小型トラックだ。アニエス達が乗るにしては意外だったのだ、私は素直に疑問を口にする。

「ロールスロイスかベンツにでも乗って行くと思った？ 帰りは荷物を運ぶんだからトラックに決まってるでしょう」

そう答えて、アニエスはロベールが開けてくれたドアから助手席に乗り込み、ロベールも再び運転席に向かう。

「どうしたの、ローランも早く乗りなさいよ」

アニエスが窓から言ってくる。

「いや、乗れと言っても……」

トラックの座席は運転席と助手席の二つだけ。しかも二つとも塞がっている。

「何言ってるのよ、もう」

分かり切ってることを言わせないで言うように、アニエスは荷台を指差す。

「やっぱりそうか……」

文句を言っても仕方ないので、トラックの後ろに回って荷台に乗り込んだ直後、トラックはゆっくりと発進する。

「そこに置いてある剣、落ちないようにちゃんと見てなさい」

座席の後ろの窓からアニエスが言ってくるので、私は置いてあった剣の束の側に座る。

「何で剣なんて持って行くんだ？」

いつの間にかこれも持参させられているサーベルを持て余しながら、私は尋ねる。

「必要だからよ」

「必要って、もう少し詳しく教えてくれてもいいだろう」

不親切極まりない回答に、私は食い下がるが、

「あなた、さっきから随分不安そうだけど」

アニエスは唐突に話題を変えてくる。

「確かに私は『死ぬかも知れない』と言ったわよ。でもこうして行かなくても、今夜あなたは突然心臓発作を起こして死ぬかも知れない。他にも今から五分後、いえ、三分後に大地震が起きて、トラックごと大きな地割れに飲み込まれて私達全員死ぬことだってあるかも知れない。流石に可能性は極めて低いけど、全くのゼロとは言いきれないわよ」

「おいおい、それはいくら何でも……」

あまりに突飛なアニエスの話に、私は眉をひそめるが、

「つまりはそういうことよ。まだ起こってもいないことを怖がったり、不安になっても仕方ないじゃない。先々のことを予測して物心共に準備しておくのと、不安になるのとは全然違うわよ」

アニエスの言葉は理屈としては正しかったが、誰しも彼女のように不安を克服できるわけではない。私を含めた多くの者にとって、未知に対する不安、恐怖があるからこそ危機管理に取り組むのではないか。

トラックは町を出て三〇分ほど走り、よその町に入る。住宅の立ち並ぶ地区に差し掛かった所でトラックは停車し、

「あそこね」

周りに建つ一般的な家々とは文字通り一線を画するように、高い塀に囲まれた広い敷地に建つ屋敷を、アニエスが指差す。

「はい、間違い有りません」

地図を広げてロベールが答えると、アニエスはトラックを降りる。「付いてきて。剣も全部持ってくるのよ」

後ろに回ってきたアニエスに言われ、私は剣の束とサーベルをよいしょ、と抱えて荷台を降りる。ロベールはさして苦もなく運んでいたが、当時の私の腕力では荷が重く、

「何やってるのよ、もう。ちゃんと運びなさいよ」

よろけそうになりながら持ち歩く私に、アニエスが振り返って言う。

「そう言われても、こんなに沢山じゃ仕方ないだろう」

私がそう返すと、

「仕方ないわね」

アニエスは私の元へ寄ってくると、また胸元で両手を組み、先程家で唱えていたのとは違っていたものの何事か唱え、最後に私の額を指で軽く突く。その途端、剣がまるで枯れ枝の束のように軽くな

る。

「一体何をしたんだ！？ 剣が急に軽くなったぞ」

戸惑いながら尋ねると、

「剣が軽くなったんじゃないの。あなたの体の筋肉が無意識に掛ける枷を外しただけよ」

事も無げにアニエスは答える。聖職者として、魔術などの類を受けるのは、どう控え目に言っても良い気分はしないのだが、

「安心なさい。悪魔の力なんか借りてないから。どちらかと言うと催眠術に近いわ。じゃあロベール、裏の方に回って後は手筈通りね」

「かしこまりました」

そう答えて、ロベールはトラックを再び発進させ行ってしまう。

「さてと。その術は二、三時間しか保たないから急ぐわよ」

せかすように屋敷の方へ歩き出すアニエスに、私も剣の束を抱えて付いていく。

「そろそろ何をするのか教えてくれても良いだろう。あの屋敷に何の用があるんだい？」

私が尋ねると、アニエスは「あつ」と、今まで説明するのを本気で忘れていたような声を上げ、続けて説明に掛かる。

「家を出る時に言ったでしょ、剣の材料と、炉にくべる石炭を集めるって。それで前から隕石探しと並行して在処を探してたんだけど、情報によると一般の工業用とかのルートではまず手に入らない最高品質の石炭が、あの屋敷に大量に運び込まれてるらしいのよ」

「お屋敷に石炭？ 何のために？」

「さあ、そこまで深く調べてないから」

「いい加減だな」

「うるさいわね。仕方ないでしょう、他にも色々探し物があつたんだし、隕石が最優先だったんだから」

アニエスの声の不機嫌の色を帯びたかと思うと、彼女は急に振り向いて一瞬で私の懷にまで距離を詰め、がら空きになっている脇の

下を挟り込むように突いてくる。

「がっ！ つうっ！」

最初に上げた声は脇に走った激痛、後の方は思わず取り落とした剣の束が足に落ちてのものだ。

左右の手でそれぞれ左脇と右足を押さえて悶絶する私に、

「脇の下は神経が集中していて、殴られるとダメージが大きいのよ。覚えておきなさい」

そう言ってアニエスはまたスタスタと先へ歩くので、私も痛みに耐えながら剣の束を拾い、急ぎ足で付いていく。

屋敷の正門の前まで着いて近くで見ると、周りを囲む塀が高いのに加えて分厚く頑丈に作られていて、上には鉄条網まで張り巡らされているのが分かり、その物々しい佇まいに、正門の両面開きの扉さえ威圧的に感じられた。

「石炭を分けて貰うのは分かったけど、あの屋敷の人にツテでもあるのかい？」

あまり落ち着かない気持ちで尋ねる私に、アニエスは「はあ？」と呆れたような声を上げる。

「そんなのあるわけないでしょう。ちよつと離れてて」

アニエスは符を一枚取り出すと、正門から距離を取ってヒョイと無造作に放る。符はフワリと飛んで扉に貼り付くと、次の瞬間耳をつんざくような轟音と共に爆発する。

「なっ——！？」

激しい耳鳴りがしつつも、また剣の束を取り落とさないよう抱える腕に必死で力を込める私の視界に、爆発で倒された扉が、原型をまるで留めていない残骸をさらしていた。

「何をやってるんだ、君は！？」

予想の遙かに斜め上を行った彼女の行動に、半ばパニックになりつつも私はそう言葉を絞り出す。煙を上げる扉の向こうでは、黒いスーツ姿の男達がいずれも緊迫した表情で走って来ている。それらとは対照的に、自分だけしっかり耳を塞いで伏せていたアニエスは

平然とした様子で立ち上がり、

「何って――」

耳鳴りに混じって、深刻さの欠片も見えないアニエスの声が辛うじて聞こえた。

「だから、石炭を分捕りに行くのよ」

「ローラン、一本頂戴」

「は？」

左手を伸ばしてアニエスは言うが、私は困惑とパニックで気の抜けた声を出す。

「その抱えているうちの一本を寄越しなさいって言ってるのよ！」
苛立ちの混ざった声でアニエスが言い直すと、

「は、はいっ！」

反射的に叫び、私は剣の束から一本、アニエスに手渡す。

「ひでえ——門がメチャクチャだ」

「たった二人だと？」

「しかも片方はガキだぞ！」

「神父の格好してるのもいやがるし、ふざけてるのか!？」

そうしている間に、黒服達も集まって来て、私達を取り囲む。

「こんなに派手に入ってくれて——間違いだったじゃ済まされないぞ」

黒服達のリーダーらしい男が言ってくると、

「ご心配なく」

アニエスは前に進み出て、剣を抜き払う。

「あなた達が出てきてくれたおかげで、間違いないと分かりましたから」

そう答えて、アニエスは剣先を黒服達に向ける。

「そんな刃物なんかで、我々を脅せると思ってるのか？」

リーダーの男が言うのを合図に、黒服達が一斉に拳銃を抜く。リーダーの男も懷に手を入れるが、

「ん？」

そこにあるはずの拳銃が、何故か掴めない。

「あれ？ い？ う？ え？」

何度も繰り返して試みるが、拳銃の感触も見つからない。それどころか、手自体の感触さえなく、男はある考えたくもない可能性に思いつき、脂汗を流しながら頭の中で必死に否定しつつ、ゆっくりと視線を足元へ下げていく。

「どうしたの？ 早く拳銃を出してみなさいよ。その手で出せるものならね」

アニエスが言った直後、切断された右手首が足元に落ちているのを見つけた男の目が、驚愕に見開かれる。

「ヒ——アアアアアッ！！」

今更のように叫ぶ男の、切断された右手の断面から流れ出す血で、地面に血溜まりを作っていくのを見て、他の黒服達の表情にも焦りと恐怖の色が混ざる。そして当然、その隙を見逃すアニエスではなかった。

アニエスは男を袈裟懸けに斬ると、胸から血を吹き出して男が倒れたことでできた間から囲みを抜け出す。

「何ボケツとしてるの！？ 付いてきなさい！」

あつという間の早業に半ば呆然としていた私の耳にアニエスの声突き刺さると、私はまた反射的に「は、はいっ！」と叫び、弾かれるように彼女の後を追って囲みを抜ける。

「行かせるな！ 撃て、撃てええっ！」

黒服達も後ろから私達に向けて発砲しようとするが、アニエスが振り返り様に符を投げつけるのを見て、また爆発するのかと思った私は咄嗟に地面に伏せて耳を塞ぐ。だが黒服達の前の地面に符が落ちると、予想に反して爆発は起きず、地面から石畳を突き破って土が盛り上がり、私達二人との間に壁となって銃弾を防ぐ。

「何だこれは！？」

予想外の事態の連続で、困惑と理解不能の声を上げる黒服達。そこへ壁を回り込んでアニエスが斬り込んでくる。

拳銃こそ持っていない、半ば以上パニックになった黒服達など、アニエスの敵ではなかった。一分もかからず全員アニエスに斬り伏

せられてしまう。もちろんアニエスは全くの無傷だった。

「――参ったわね」

溜め息を吐くアニエス。

「たった一〇人足らず斬っただけでもう刃こぼれ？　いくら練習で打ったと言っても、こんなに強度がないんじゃないわ」

不満げにアニエスが言ったその剣は、既に血にまみれ、刃こぼれだらけ、更には最後の一人が発砲した銃弾を一発避けきれず弾いたので途中から剣身が折れていた。もっともアニエスはその折れた剣で撃ってきた黒服の喉を切り裂いたのだが。

「何を呑気に言ってるんだ！？　こんなに人を殺して！」

今更ながらという感は拭えないものの、私はそう抗議するが、

「大丈夫大丈夫。今頃裏に回ったロベールが電話線とかを切断してるから、外に連絡される心配はないわよ」

「そういうことを言ってるんじゃない！」

気楽な口調でいうアニエスに、当然ながら私は食い下がる。

「ああ、もしかして罪に問われるのを心配してるの？　それも大丈夫よ」

剣を放り捨てて、アニエスは続ける。

「ここは裏社会では名の知れた組織のボスが住んでる屋敷で、当然この人達も組織の構成員。どこから見ても地球に優しくない、一〇〇パーセント天然物の悪者ばかりなんだから、駆除した方がむしろ喜ばれるわよ」

「そう言うのは君個人が判断して良いことじゃないだろう！？」　第

一周りの住民が通報して、警察が駆けつけてきたらまずいだろう！」

「ああ、それは心配ないわよ」

アニエスは手をヒラヒラさせながら、私の懸念を否定した。

「さっきも言ったけど、ここは裏社会の組織のボスの屋敷よ。カタギの人間が裏社会と関わることがどれだけ危険か、この辺りの住民は骨身に染みるほど知ってるし、この世からいなくなっちゃえば良いと思っている。だからこの、善良な人達から搾り取った金で建て

た豪邸と、それを囲む分厚く高い塀の中で何が起きたって、周りの住民は一切見ざる聞かざるで、決して警察に通報なんてしやしないのよ。分かる？」

さも当然のことのように、アニエスはそう説明してくる。

「まあいずれにしてもここまでやった以上、途中で逃げるなんて向こうがさせてくれないでしょうし、まして謝って許してくれるはずがない。あなたにしたって無理矢理連れてこられたなんて言い訳は通じないでしょうから、最後まで付き合うしかないのよ」

そうアニエスが話しているうちに、屋敷の建物から増援らしき黒服達が続々と飛び出しこちらへ向かってくる。

「そう言うわけだからローラン、次の剣を頂戴」

アニエスと黒服達を止める言葉が見つけれない己の不甲斐なさを、心の中で神に詫び、無理と分かっているながらも許しを請いながら、私は剣の束から一本取り、アニエスに手渡したのだった――

それから先はもう、アニエスの独壇場だった。

向かってくる相手は即座に斬り伏せ、建物の中に乗り込んでからも敵が出てくる側から即座に斬り倒す。物陰や部屋の中に隠れている敵も、アニエスが符を投げつけると煙が吹き出し、激しく咳き込みながら涙を流して出てきた所を斬られた。こう話すと手当たり次第に虐殺しているように思うかも知れないが、メイドを始め使用人など、いわゆる戦意のない者達は逃げるに任せて一顧だにしない。もつとも逃げる振りをしてアニエスを後ろから襲おうとしてくる者もいたが、そういう連中は必ず察知され、犠牲者の列に加えられた。正直後ろから付いていく私の方が、流れ弾の恐怖に怯え、騙し討ちの不安にさいなまれて寿命の縮む思いだったが、少しでも歩みが遅れば即座にアニエスから罵声が飛び、「次！」と指示が来ると即座に替えの剣を渡さなければ容赦なく足を踏まれた。

そうした合間に、アニエスは建物中そこかしこの壁や柱に符を貼り付けていて、私は好奇心よりもどちらかと言うと不安から、その

符は何かと尋ねると、

「後で教えてあげる」

それ以上の追及は許さないというように短く答えると、部屋のドア越しに撃ってくる黒服の方へ詰め寄り、薄いドアごと黒服を刺し貫くのだった。

「さて、ここが最後ね」

建物の奥にある、いかにも嚴重そうなドアの前までたどり着くと、アニエスは独りごちるように言う。

既に屋敷の主の部屋が空になっていることを確認しており、もう逃げたのだろうかと私は言ってみたが、「そんなはずないでしょう」とアニエスは一蹴。それから手当たり次第に建物中を探し回り、途中で襲ってくる敵は引き続き問答無用で斬っていったから、建物中死屍累々の様相を呈していた。

「アニエス様！」

そこへ裏口から入っていたロベールも駆けつけてくると、アニエスは「遅い！」と彼のみぞおちに拳を叩き込む。

「こっちが表から派手にやり合って敵を引きつけてたんだから、もっと早く来なさい」

相変わらず手厳しく言うアニエスにロベールが「申し訳ありません」と謝る。

「電話線を見つけるのに思ったより手間取りまして……」

そう理由を述べるロベールだが、興味なさげなアニエスにドアを開けるよう促され、ドアノブに手を掛けガチャガチャと動かす。

「鍵が掛かっているようですが、いかがいたしますか？」

「見れば分かるわよ」

目の前でいちいち報告しなくていいというように答えると、アニエスはドアノブの付け根に符を貼り付ける。そして右手の人差し指と中指を向けて「疾！」と叫ぶと、高い音を立てて符が破裂し、ドアノブや周りごと鍵を吹き飛ばしてしまう。

「先に入って」

アニエスにそう命じられてロベールが最初にドアを押し開け中へ入り、彼を盾にするようにアニエスが後ろに続き、屋敷に入った時と比べるとかなり本数が減った剣の束を抱えて私が最後に入る。

「ふうん」

部屋を見回すアニエスが納得げに声を上げる。部屋の壁の大部分を占める棚には難解そうな化学や医学らしき専門書や、私にも読めない文字が背表紙に書かれた本、何かの薬品などが数多く並び、机にはビーカーやフラスコ、顕微鏡を始めとした実験道具が置かれていた。

「まるで実験室か研究室だな」

鼻を突く薬品らしき臭いに眉をひそめながら言う私に、

「まるでじゃなくて、実験室か研究室なんでしょう」

そう答えてアニエスは部屋の奥で私達を睨み付けている、一目で高級品だと分かる衣服を身に着けたのと、白衣姿の老人らしき二人へ目を遣る。らしき、と言うのも何故か二人ともガスマスクを付けていて顔が判別できず、何故そんな物を付けているのか不思議に思った途端、いきなり膝から力が抜け、私は床に崩れ落ちる。

「どうだ、特製の痺れガスの味は？」

白衣の老人が、ガスマスク越しにくぐもった声で尋ねてくる。もう一人の老人もクックックと含み笑いを漏らし、

「儂は部下どもと違って、自分の能力を過信はしない。今のようにな戦う前から自分が確実に勝てる状況を作り、敵を潰す。そうやって儂は、裏社会で生き延び、のし上がってきたのだよ」

屋敷の主で組織のボスらしいその老人は私と、ほぼ同時に倒れたロベール、そして未だ倒れずにいたが時間の問題だろうアニエスを油断なく見据えつつ拳銃を抜く。

「すぐには殺さんぞ。これからじっくり時間を掛けて、貴様らのバツクを吐かせてやる。言っておくが、儂は子供だからと言って手加減するほど優しいぞ」

言いながらボスは銃口をアニエスに向け、彼女が倒れるのを待つ。

だが、アニエスは倒れている私達に視線を向けると溜め息を吐き、
「何倒れてるのよ、もう」

そう言って老人達に向けて符を投げつけると、彼らの間を抜け、
背後で爆発する。爆風で老人達は前のめりに倒され、壁に空いた穴
からガスが抜けていく。

「ほら、これを飲みなさい」

アニエスが小さく丸めて口の中に入れてくれた符を飲み込むと、
体中の痺れが次第に消えてきて、少々無理をしつつも私は身を起こ
す。

「な、何でお前はマスクもないのにあのガスの中を平気で動けたん
だ!？」

衝撃でガスマスクが外れ、素顔を露わにした科学者らしい白衣の
老人が、信じられないと言った口調で問う。

「ガスなんて吸わなければ意味ないわよ。部屋に入った時、薬品の
匂いがしたからもしかしてと思って息を止めてたのよ」

大したことではないと言うように答えるアニエスだが、

「息を止めただと? それでこれだけの時間動いていたというのはか
!？」

科学者の動揺ももつともで、深呼吸で肺に一杯空気を取り込んで
ならともかく、普通に呼吸をしていて薬品臭に気付いて咄嗟に止め
る、それも動きながらでは良い所一分が限界だろう。

「私、五分は息を止めて動けるんだけど」

そう言ってまた符を出して放ると、次の瞬間符は何本もの針、そ
れも長さ三〇センチはあろうかという太い針に変わって科学者の手
足を貫く。

「五分って、そんな長い時間無呼吸で動けるわけないだろう!？」

昆虫採集のように床に縫い止められた科学者に代わってではない
が、ついそう叫んでしまう。

「大した時間じゃないわよ。私の師匠は一呼吸で半日は持つし」

「どんな怪物だ? と言うか君に師匠がいたのか?」

「話をすり替えないで。あなたも最低三分はいけるようになってもらわなきゃ」

さりとて厳しいことを言いながら、アニエスは柵から研究記録を抜き出し目を走らせる。

「硫黄、水銀、塩、それに四大元素……賢者の石の精製——どうやらこの人、科学者と言うより錬金術師みたいね。石炭も研究に必要だったと。で、この主人が研究資金を出してみたいね。エリクサーが目当てで」

「エリクサー？」

「どんな病気も治し、年も取らなくなる効果を持つ——早い話が不老不死の薬よ。お金を始め、あらゆる物を手に入れた欲望の行き着く先は、古今東西変わらないわね」

呆れた口調でアニエスは答えながら、爆発と壁の破片で背中が傷だらけになったボスに目を遣る。

「本当に馬鹿よね。どれだけ生きたかより、どう生きたかの方が重要なのに」

追い討ちを掛けるような嘲りの台詞だったが、私は心の中で同意する。短命な人生は確かに悲しいが、長生きすれば良い人生とは限らない。重要なのは神によって定められたそれぞれの命の中で、真理と善を求め、徳を高め、課せられた使命を果たすことではないのか。

とは言えそれらを実践できていない現状に心の中で嘆いていると、ボスは既にガスマスクが外れ、頬がたるみ老人斑が浮き出た顔を怒りの形相でドス黒く染め、服の中にもう一挺隠していたのか拳銃の銃口を私とアニエスに向ける。

「アニエス様！」

ロベールが叫んで駆け寄ろうとするが、痺れガスから回復したばかりの体では動きが鈍く、拳銃の引き金がかかる。

当たる——そう思った瞬間、すぐに飛んでくると思っていた弾丸は、銃口からゆっくりと回転しながら出てくる。何故こんなにゆっ

くりなのか分からなかったが、一方でこれなら避けられないこともないだろうが、避けたらアニエスに当たるかも知れないと冷静に思考している私がいた。直ちに代わりの手段を探し、記憶の中からつい先日あのエミリー・ベレッタの放つ銃弾をアニエスが短剣で弾いた光景を拾い出す。次いで両腕に抱えた剣の束から私用に持たされたサーベルを見つけ、

『体格から考えると、あなたは力で押すよりも、速さ重視で戦う方が向いてそうだから、そのサーベルが良いわね。まずは抜き打ちで敵を斬れるレベルが目標かしら』

つい先程アニエスから言われた台詞を思い出し、即結論を出すと、私はサーベルを残し他の剣を全て手放す。

ところが私の腕と指はまるで泥沼に填っているように鈍く、私は懸命に力を込めて左手でサーベルを掴むと、他の剣がまるでスローモーションのようにゆっくりと落ちていくが、理由を考えている余裕などなく、右手でサーベルの柄を掴み、渾身の力を込めて鞘から引き出す。これもまた、鞘の中に糊でも入っているかのようになかなか抜けず、もどかしさと焦りの中でようやく剣身を抜き放ち、尾のように煙を引きながら私に迫ってくる弾丸に沿えるように刃を当てると、まるで果物のように弾丸が真っ二つに割れ、回転の勢いでそれぞれ明後日の方向へ飛んで行った。

「なっ——拳銃の弾を斬っただど!？」

緊張の糸が切れて、ようやく普通に動けるようになった私の前で愕然となるボスだったが、その半開きになった口にアニエスが剣を突っ込むと、拳銃を握った手が床に落ち、二度と動かなくなる。

「何だったんだ、あれは……」

つい今し方起こった現象に、今更ながら混乱する私に、

「最初にしてはなかなか良い抜き打ちだったわよ、ローラン」

微笑みながらそう言うてくるアニエスは続けて、

「弾丸やあなた自身の動きがものすごく遅く感じたでしょう？人は命の危険に陥った時、周りの景色が遅く見えるって言うけど、あ

れは危険で脳が高速回転して目からの映像を処理するから遅く映るのよ。もちろん大抵の場合は体の動きが追いつかないんだけど、そこはさっき私が掛けた術のおかげで対応できたんだから感謝しなさい」

そこまで計算していたのよと言わんばかりのアニエスだったが、ここで文句を言うともた面倒なことになりそうだったから素直に「ありがとう」と言っておく。

「一回の実戦で得られる経験値は道場での鍛錬一年分に相当するそうだから連れて来たけど、最初の“扉”を開けたのはまずまずの滑り出しね」

そう呟くアニエスの口調は、弟子の成長を喜ぶ師のようだったが、動物実験の結果に喜ぶ科学者のようにも聞こえたとしても、ここまでの経緯を知れば私を責めることはできない。

「ようこそ、私達の世界の入口へ」

芝居がかった口調でアニエスが言ってきた通り、これさえも後に裏社会で語られることになる“星の剣舞姫”の伝説の、初期の一ページにしか過ぎなかったことを、私は身を以て知ることになるのだが、正直この時は頭の中が一杯一杯で、そうしたことを考える余裕はなかった。

その後は、ロベールと二人でこの屋敷に来た目的である最高品質の石炭を探してトラックに運び込み、その間アニエスは「やることがあるから」と私達とは別に動いていたが、私達が作業を終えてトラックを停めてある裏口に合流する時、彼女の服のポケットが前よりも膨らんでいた。当然何を入れているのか尋ねると、アニエスはポケットから赤や緑、その他色とりどりに輝く石を出して見せてきた。もちろんこんな屋敷にあるということは、ガラスや玩具の類であるはずがないことは容易に想像できた。

「大丈夫よ。上等なのをいくつか貰って来ただけだから」

あっけらかんと言ってくるアニエスに、「そういう問題ではないだろう」と言い返すと、彼女は宝石をポケットに戻し、代わりに例の隕石の欠片から作ったという短剣を抜く。

「そ、そんなに怒ることないだろう!？」

何とかアニエスをなだめようとするが、彼女は何をそんなに慌てるのというような顔を見ると、屋敷の方を振り返り、何度か術を使う時に見てきたような呪文らしきものを唱え、

「疾!」

力強く叫びながら、短剣を地面に刺す。直後、それが爆弾の起爆スイッチだったかのように屋敷の建物の各所から同時に爆発が起こり、瞬く間に轟音を立てて崩れ落ちる。

「なっ——!？」

口を開けて呆然とする私とは対照的に、アニエスは満足したように頷く。

「良し——それじゃさっさと撤収するわよ。ロベール、出して。ローラン、呆けてないでさっさと乗りなさい」

あまりに突然で衝撃的な光景に思考停止に陥る私だったが、アニエスに強引に促されて行きと同じく荷台に乗り込み、次いでアニエ

スが助手席に乗り込むと同時に、トラックは勢い良くその場を離れた。

「何だあれは!？」

石炭が積み込まれ、行きの時よりだいぶ狭苦しい荷台から私がそう言えるくらいに落ち着いたのは、トラックが発車して一〇分ほど経ってからだった。

「何って、爆破したのよ」

何を分かり切ったことを訊くのかと言うように答えるアニエスに、「その位私にだって分かる。君が建物のそこら中に貼っていた符とこののを一斉に爆発させたんだろう?」

「そうよ。で?」

「いくら何でもあそこまですることはないだろう!？」

本当はそれ以前に屋敷中で暴れ回る、と言うよりそもそも欲しい物があるから乗り込んで奪い取るということ自体が普通ではないのだが、至らぬながら正直そこまで追及する気力は失せていた。だがアニエスは不服そうに眉を寄せ、

「何言ってるの。私なんてまだ優しい方よ。私の修行時代なんて、例の爆発の符を貼り付けた槍を、外から盗賊団の根城へ何十本もビュンビュン投げ込んで、向こうに落ちる側から爆発してあつという間に燃え広がって、焼け出された盗賊達を『さあ、残り全員叩き斬ってこい』って放り出されたのよ」

そう昔話をするアニエスに、絶句するしかなかった私を誰が責められるだろうか? 同時にアニエスの常軌を逸した修行法や、人命に対する考え方の違いは、その師匠とやらの影響を多分に受けていることを、私は理解した。

「あ、そうそう」

思い出すようにアニエスは続けて言った。

「屋敷に入る前にあなたに掛けた術——そろそろ切れる頃だから」「ああ、そう……」

無茶苦茶の連続の後で、流石にもう力仕事はないようだから些細なことと思い、生返事を返す。だが、その時私は気付いていなかった。アニエスが私に掛けた術は、筋肉が無意識に掛けている枷を外して通常より遥かに強い力を出すそうだったが、何故人間は無意識のうちに筋肉に枷を掛けているのかを――

『明後日にまた次の材料を取りに行くから、今日と同じ時間に家に来るのよ。あと、術を掛けなくても付いていけるように、普段からもっと鍛えなさい。じゃあね』

そう自分の用件だけ言うと、私の返事も待たず電話口の向こうでアニエスは一方的に電話を切る。

「クッ……」

受話器を戻そうとして、腕に痛みが走り、私は思わず声を漏らす。アニエスが彼女なりに気を利かせて教会までトラックで送ってくれたのだが、降りてすぐに術が切れると、途端に筋肉に掛けている枷を外して長時間動き回った反動で疲労が全身にのしかかり、更には鈍い痛み――筋肉を限界を超えて酷使したことで筋肉痛が襲いかかってきた。

昼間使った筋肉には普段使わない箇所も含まれていたらしく、場所によって多少の差はあるものの、ただ歩いているだけでも体のあちこちが痛く、食事や祈りは相当な苦行だった。

「神よ、私は罪を犯して、心から愛しているあなたに背いたことを深く悔やんでいます。御子イエス・キリストが十字架の上で流された御血によって、私の犯した罪をお許し下さい。お恵みによって心を改め、再び罪を犯してあなたの愛に背くことのないよう決心いたします。アーメン――」

そう悔い改めの祈りを唱えるも、最後の言葉が守られることは決してないことが――明後日にもまたアニエスが剣の材料を調達するために大暴れする可能性が高く、私がそれを止められない可能性は限りなく一〇〇パーセントに近いだろうと分かっていた。

それでも私は聖職者として祈らずにいらなかったし、いつか迷える魂に天国への道を示す方法を見つけるために修行を続けようと心に決めていた。半ば強制的に踏み出す羽目になった道だったが、立ち止まることも引き返すことも考えられなかったし、私がこうして生きていることが進めという神の意志かも知れなかったからだ。それはこの日の騒動と苦痛がまだ序章に過ぎなかったと言えるほど、苦難に満ちた道行きとなるのだが、それらについて語るのは、また後日のことにしよう。

人は何かに執着する傾向のある生き物だ。

良くある例では財産や地位、服や装飾品、家族や恋人などを求め、手に入れば手放すこと、失うことを怖れ、拒み、もっと手に入れようとする。そうした執着がエスカレートして盗みや暴力、殺人などの事件が起きるケースは歴史上という大きな視点で見るとなぐ枚挙に暇がないし、それらの最たるものが戦争ではあるまいか。

そのためキリスト教を初め、多くの宗教が物事に執着することを戒めているが、一方で物事に強く心惹かれることで、例えば恋をして、結婚して、子を為して作られた家庭は祝福すべきものだし、一つのことに懸命に努力して学問やスポーツ、芸術などの分野で立派な業績を上げた者は言うまでもなく、例えひとかどの業績を上げられなかったとしても勤勉に、誠実に生きた者は尊敬されこそすれ軽蔑されるものではない。私達カトリックを初めとするキリスト教にしても、古代に幾度も激しい迫害を受け、多くの殉教者を出してきたが、それでもなお迫害や死を怖れず信仰を守り続けた人達のおかげで今日世界中に広まっているのだ。

つまり方向を間違えず、理性を失わず、常に神の言葉を心に留め、強い意志を持って自分の道を邁進し、やがて時が来たならば安らかに神の元へ行けるよう、財産や生への執着を捨てよということなのだろう。

だが現実はその簡単に執着を捨てられず、死ぬ寸前に至っても財産にしがみつき、他人への愛欲や憎しみを抱き続ける者さえいるのだから、キリストの教え通りに生きるといえるのは誠に難しいと思いませんか。

中には死後もなおこの世に執着を残し、霊となって留まる者もいて、そうした者達が見えることが、私に聖職者への道を歩ませるきっかけでもあった。

そして、更にその中には執着が強すぎる余り、その者が生きてい
る、死んでいるを問わず人や世界に多かれ少なかれ影響を——大抵
の場合は災厄という形で——及ぼすことがあり、私はアニエス・紅
と共に多くの事件と戦いに関わってきたが、それは同時に幾多の、
且つ様々な形の執着を見るところということでもあったのだ。

水しぶきを上げ、鯨が海面から顔を出す。

それが大きく開けた口には鋭い歯が何列にも並び、目の前にいる私の肉を噛み、引き裂こうと向かってくる。

私は波で揺れる船の上で懸命に姿勢を保ちつつ、サーベルを鞘から抜き放つと、鯨の上顎と下顎の間に刃を叩き込む。血を吹き出しながら鯨の口は更に広がり、腹まで裂けると下顎が体から離れ、船の上に転がる。下顎を失った鯨は数秒間海面でのたうち回るが、やがて力尽きたか派手に水しぶきを上げて倒れると、辺りの海を赤く染める。

「次が来るわよ、ローラン！」

いつも通りのレースとフリルで飾られた黒いドレス姿でアニエスが叫ぶ。側には彼女の四匹目の獲物となった鯨が、折れた剣を突き立てられた状態で海面に浮かんでおり、アニエスは柄だけになった剣を放り捨て、船の上に転がしてある剣の束から次の剣を取る。

近くに浮かぶ他の船では屈強な漁師達が太い鉈を手に数人がかりで鯨と格闘し、別の船ではハンターが大口径の銃火器で鯨を穴だらけにしていくな。

「この分なら、全部の鯨を退治するのも時間の問題ですね」

先程私が斬った鯨の下顎を海に捨てながら、ロベール・コラフェイスが言ってくる。

「何呑気なことを言ってるのよ」

私が三匹目の鯨の横っ腹を切り裂くのと同時に、五匹目の鯨の上顎から頭まで剣を突き通すと、アニエスは鯨の死骸から刃を抜いて血を払う。

その直後、船団の右端から悲鳴が上がり、見ると船の一隻が船底をやられたらしく沈んでいるところで、乗組員達が必死で助けを求めている。そこへ海面から現れた大きな背びれが凄まじい早さで接

近してくると、ゆうに船の全長の倍はありそうな巨大鯨が大口を開けて海上に姿を現し、信じられないことに船体を噛み砕き、食べ残しをその巨体で引っ繰り返す。

「何て大きさだ！ 二〇メートルはあるんじゃないか！？」

「ちょっと待て！ だとしたらジンベエザメよりデカいってことになるぞ！」

「本当にいたのかよ！ 地元の漁師達のフカシじゃなかったのかよ！？」

「いるも何も目の前で泳いでるじゃねえかよ！！」

仲間の惨状を目にして、他の船に乗り込んでいる者達が一斉に騒ぎ出す。

「あれが例の、鯨の群れを率いてるっていうボスね」

船団の真ん中程に位置する船から眺めながら、アニエスが呟く。

「いかが致しますか、アニエス様？」

流石にロベールも不安げな表情で尋ねると、

「そうね——少し様子を見てみましょうか」

意外な返答に、思わず眉をひそめる私に、

「何よ、その意外そうな顔は？」

訝しげにアニエスがそう尋ねてくる。

「いや、今までの君のパターンからして『すぐあそこへ向かいなさい！』って言うものだと思っていたから」

答える私に、アニエスはムツと眉を寄せ、

「ローラン、あなたは私のことを、目当てを見つけたら即座に突っ込んで行く猪みたいな娘だと思ってたの？」

「違ったのかい？」

「違うわよ！」

そう否定しながらアニエスは剣の鞘で私のみぞおちを突こうとしてきたので、流石に私も黙って受けるつもりはなくサーベルの鞘で防ごうと身構えるが、途中で鞘の先が跳ね上がって私の顎を直撃する。

「銃弾と違って、剣や打撃は途中で軌道が変わることだってあるのよ。“見える” ようにはなったみたいだけど、相手の動きを読むことも覚えなさい」

打たれた顎をさする私に、アニエスはそう言ってくる。

「さて、向こうのボス鯨だけど——他の船もいるから、今行くのはちょっと無理ね」

アニエスの言う通り、今さっき仲間の船の惨状を生で見たにも関わらず、他の船達が我先にと巨大鯨に殺到していた。何しろ乗り込んでいるのは地元の漁師ではなく、金で国内外から集められた腕自慢の漁師やハンターばかりで、あの巨大鯨を仕留めれば高額な報奨金と名声が得られるとばかりに、皆恐れを知らずに向かって行く。

だが、巨大鯨の皮は逞しい腕で振り下ろされた鉋を通さず、逆に鉋はひしゃげ、噛み砕かれ、大口徑の弾丸や爆弾でも傷一つ付けられず、その大きく鋭い歯と巨体で船体を引き裂き、引っ繰り返されて沈められる船が増える一方だった。

「そろそろかしらね」

船団の半分以上の船が沈められる頃になって、アニエスはそう呟くと、

「ロベール！」

「はい、アニエス様！」

分かっていますと言うように、ロベールは船を動かす。方向は言うまでもなく巨大鯨だ。

「アニエス、沈められた船に乗ってた人達を助けなくて良いのか？」
海に投げ出された人達を見ながら私は尋ねる。幸い船と一緒に沈んだ人や、巨大鯨の餌食にされた人は1人もいないようだった。

「大丈夫よ。仮にも腕自慢の漁師やハンターなんだから、自力で何とかするわよ」

予想は付いていたが、素っ気ない返事を返すアニエス。実際彼女の言う通り、彼らは自力で無事な船まで泳ぎ、引き上げられていく。一方アニエスは彼らの方には目もくれず、巨大鯨を睨みながらま

た新しい剣を取る。

「アニエス、あの鯨を放っておいたら危険なのは分かるが、仲間も助けないと……」

「早く退治しないと、沈められる船が増えるばかりよ。救助は他の船に任せましょ」

私の言葉を一刀両断に斬り捨て、アニエスはひたすら巨大鯨に向けて船を進める。間近で見ると一層巨大に感じられるその姿に、まだ常識的な感覚が残っている私としては逃げ出したい思いだったが、そう口にした所でアニエスに即却下され、下手をすればまた殴られるだろうと予想できる判断力、想像力の方が、悲しいかな勝っていた。

「さて」

アニエスは一言呟くと、ドレス姿からは想像できないほど高く――巨大鯨の頭上まで跳躍すると、

「フッ！」

大上段に剣を振り上げ一気に振り下ろす。上段からの勢いに落下の重力も加わり、巨大鯨は頭部の傷から血を吹き出す。

「お見事です、アニエス様」

船に着地したアニエスに、ロベールが言ってくるが、

「まだよ」

硬い声でアニエスは返す。

「皮一枚だけで、肉は切れてないわ。見た目は派手に血が出てるけど、あの巨体からすれば大した出血ではないはずよ」

アニエスは血に塗れ、刃こぼれだらけになった剣を捨て、また次の剣を束から取る。そこへ傷を付けられて怒ったのか、巨大鯨が口を一杯に開けてこちらへ向かってくる。あの大きく鋭い歯なら船の外板や甲板に容易に食い込むだろうし、巨体とこれまでに何隻もの船が沈められたことから、あの顎が船をクッキーのように易々と噛み砕けることは容易に想像できた。

そんな地獄の門のように開かれた巨大鯨の口に、

「ロベール、行ってきなさい！」

お使いにでも出すように言うアニエスに背中を突き飛ばされ、つんのめるロベールの前に巨大鯨の歯が迫る。

「フンッ！」

だがロベールは咄嗟に両腕を上げて巨大鯨の上顎を受け止め、更に信じられないことに、自分から巨大鯨の下顎に足を踏み入れて口を閉じられないようにする。無論歯がびっしりと並んだ巨大鯨の口の中でそんなことをして無傷で済むはずがなく、両腕は手からの出血で真っ赤に染まり、巨大鯨の下顎からもダラダラと血が流れているが、それが巨大鯨の血でないことは明白だった。それでもロベールは体をつ張って、巨大鯨の顎の力に対抗している。

「さあ、今のうちにやるわよ、ローラン」

アニエスの言葉に、私もロベールの体力が尽きる前に巨大鯨を倒さなくてはと、サーベルの抜き打ちを目の前の敵に叩き込む。だが、剣身が巨大鯨の体に当たった瞬間、手に返ってきた硬い感触に私はサーベルを取り落としそうになる上に、巨大鯨の体にはかすり傷程度しか与えられない。考えてみればアニエスほどの腕でも皮一枚切るのが精一杯だったのだから、肉や骨はもとより、皮も相当強靱なはずだ。

「何やってるの、ちゃんとサポートしなさい！」

アニエスの罵声を受けつつ、私はどうすればあの巨大鯨にまともな傷を与えられるか必死で考える。考えても時間の無駄かも知れないが、このまま闇雲に斬りつけても、ただでさえ刃こぼれだらけのサーベルが余計痛む上に体力も浪費するばかりだ。ロベールの体力の限界を考えれば極めて短く限られた時間で私は考える。ただ考えるだけではない。目で巨大鯨と海をつぶさに見て、耳で周りの音の全てを聞き取り、肌で風と船の揺れを、鼻で臭いを、舌で潮の味をと、五感の全てを総動員して情報を収集し、脳でそれらを統合、分析する。そして最適な行動を弾き出すまでに掛かった時間は、数字としては数秒間に過ぎなかったが、私の感覚と脳はその何倍、いや、

何十倍、いや、何百倍かも知れない負担を強いられる。だが休む余裕もなく私はサーベルを逆手に持ち替えると、再び巨大鯨に向かう。

巨大鯨は突っ張り棒のように小癪な人間を噛み砕こうと顎に力を込め、時には身をよじって振り払おうとするが、ロベールは懸命に耐える。流石に海中に潜ってしまえばロベールでも息が続かないだろうが、それをしないのは群れを率いるボスとしてのプライドだろうか。

そして何度目だろうか、巨大鯨が激しく身をよじると、この時を待っていた私はタイミングを合わせて身を乗り出し、体の側面にあるエラの片方にサーベルを突き立てる。水中の酸素を取り込み、二酸化炭素を排出するために水を出し入れする裂け目に、サーベルは先程斬りつけた体の固さが嘘のようにズブズブと沈んでいく。それに伴い巨大鯨の動きは苦痛で一層激しくなり、剣身が根元から折れてしまう。

それで刃を抜くことができなくなり、血を吹き出しながら暴れる巨大鯨のもう片方のエラにも、私は剣の束から取った一本を刺す。巨大鯨はより激しく暴れ、辺りの海面は真っ赤に染まる。

そこで私は周りを見回すと、アニエスの姿が見当たらず、まさか海に落ちたのかと不安に襲われるが、

「ちよっと、ローラン」

いつの間に飛び移っていたのか、巨大鯨の頭上からアニエスが言ってくる。

「何下手に手負いにして暴れさせるの。上に乗ってるのも一苦労よ」
そうアニエスは文句を言うが、激しくのたうつ巨大鯨の頭の上にいながら、彼女の立ち姿は地面の上のように安定したものだ。

「全くもう——」

アニエスはフワリと跳躍、巨大鯨の目の前の空中で器用に身を翻し、右手に持った剣を巨大鯨の左目に突き立てる。剣は眼窩を通じて脳まで届いたらしく、巨大鯨の動きが止まる。そしてアニエスが剣を引き抜き、軽やかに船に着地すると、巨大鯨は水しぶきと共に

海面に倒れ、それで起こった波に大きく船が揺れ、私は落ちるまいと船の縁にしがみつく。

揺れが落ち着くと、私は縁から手を離して立ち上がろうとするが、既に側に来ていたアニェスに剣の柄でみぞおちを突かれ、私はまた甲板に膝を突く。

「何よあの中途半端な戦い方は。敵の注意を引きつけるなら防戦に徹する、倒すなら一気に倒しなさい。下手に手負いにするから暴れちゃって、おかげで私が無駄に体力使っちゃったじゃないのよ」

「体力を使っちゃって、とてもそういう風には——」

私の返答は頭への拳骨で強制的に中断させられる。

「分かってないわね。あんなに激しく動く足場の上で立つというのはバランス感覚が要るのはもちろんだし、体力や気力を使うのよ。そもそも今の戦い方にしあって、私達の世界の“扉”を一枚開けたくらいで調子に乗ってるんじゃないの？ 自分と相手の強さも測れないくせに」

そんな感じで一方的になじられると、反論の機会も与えられず、傷の治療を済ませたロベールと一緒に、巨大鯨の死骸を曳航するためロープで縛る作業をやらされる。その間、手伝いもせずジュース片手に一人休息しているアニェスの姿を見て文句を言いたい、できることなら殴りたいという衝動を抑えることが、流石に神の与えた試練とは思えなかったのは、当時はまだ若かったことを差し引いても、私の不徳だろうか？

アニエスとロベール、そして不本意ながら私が裏組織のボスの屋敷を壊滅させてからおよそ一ヶ月、アニエスが剣の材料調達で様々な所へ行く都度、私も連れて行かれたが、一つとして命の危険を伴わない場所はなかった。

ある時は深い森に分け入って、奥地に生える巨木から枝を取りに行ったのだが、途中で狼のテリトリーに入ってしまった、何十頭もの狼の群れに襲われ、森の生態系の重要な一部であることと「食べられないから」という理由でアニエスが殺すことを禁じたために、身を守りながら逃げなくてはならず、その際にアニエス達とはぐれ、危うく森の中でたれ死ぬ所だった。

またある時はある高山にしか生息しないという蛾の繭を取りに行ったが、平地よりも空気が薄い上に厚く雪が降り積もった山を、他人のペースなどお構いなしで登って行くアニエスについて行かなくてはならず、寒さと酸素不足で天使の幻覚さえ見て、私が倒れたことに気付いたアニエス達が引き返してこなければ、本当に天国へ行く所だった。

そして今度は漁場を荒らす鮫の群れ退治に参加という具合に、どれもこれもが死と隣り合わせで、死にかけたことも一度や二度ではなかった。だがアニエスの命令に対し拒否を言う権利など当然なかったので、生き延びるため材料調達と教会の仕事の合間に僅かな時間を見つけては体を鍛えるなど、死に物狂いで戦闘力を上げることにも努めた。人間命懸けになると大抵のことはできるとは良く言ったもので、最初はアニエスに筋力を限界まで引き出す術を掛けられ、散々引っ張り回された末、術の効果が切れるや反動の疲労や筋肉痛に襲われたが、先程話した鮫退治では術なしで鮫と戦えるまでになっていた。そこまで含めてアニエスの目論見だったのかは分からなかったが、ともかく生き物に対してはアニエスのサポートが務まる

ようになったものの、肝心の霊への対処法については何一つ教えられなかった。

物事には順序というものがある、というのは社会の一つの摂理で、私もそこまで行ってようやく霊を相手にする段階に上がったのだが、ここでもまたアニエスのやり方と言うか悪い癖で、客観的に見れば大事なステップのはずが二段も三段もすっ飛ばされたせいで、命の危険どころか下手をすると死後までも苦しむ危険に初っ端から晒されることになったのである。

鮫退治の翌週、例によってアニエスに呼び出されると、いい加減霊への対処法を教えるよう要求するつもりで彼女の家のドアを叩いた。

「いらっしやいませ、神父様」

いつものようにロベールがドアを開けて、私を中に入れる。

最初に来た時には一階しか片付いていなかった内部も、この頃には隅々まで掃除が行き渡っており、案内するロベールも心なしか誇らしげに見えた。

「アニエス様、ボードワン神父様が来られました」

ドアの向こうから「入りなさい」と返ってきて、私達が応接間に入ると、アニエスがいつもの黒いドレス姿でソファアに座っていたが、今回はテーブルの上に年齢相応の可愛らしいデザインのポシェットが乗っている。

「じゃあ早速だけど、行くわよローラン」

私が入って来るなり、アニエスはソファアを立ってポシェットを肩に掛ける。

「行くって、今度はどこなんだ？ また海か？ それとも山か？」

霊への対処法を教えるよう要求するつもりが、会って早々機先を制され、諦めの混ざった口調で私が尋ねると、

「違うわよ」

「じゃあ森か？ それとも地獄か天国か？」

「何それ、冗談のつもり？」

私の皮肉をあっさり一蹴すると、これ以上の問答は無用とばかりにアニエスは言った。

「パリよ」

「パリ!？」

アニエスが口にした意外な目的地に、私が困惑しながら聞き返したのは、これまでアニエスに連れ回された場所を思えば当然だろう。

フランスの首都・パリの一区にあるヴァンドーム広場は、そこから通じるラペー通りとの界限に“ザ・リッツ”の通称で知られるホテル・リッツ・パリ、パーク・ハイアット・ヴァンドームに代表される高級ホテルや、カルティエ、ティファニーなど世界的なブランドに加え、フランスでも屈指の老舗宝飾店が幾つも店を構えることから別名“パリの宝石箱”と呼ばれている。

毎度のパターンながら、アニエスに強引に連れて来られた私は、広場の中央に立つ、かのナポレオン一世がトラヤヌス記念柱を模して建てさせたという円柱を半ば呆然と見上げていたが、

「何ボーツとしてるのよ、ローラン」

アニエスに声を掛けられ我に返ると、スタスタとラペー通りへ歩いていくアニエスを、私は慌てて追いかける。

アニエスが目的を全く話さないの、おとなしく従いつつも困惑する私だが、どうせまたまともな用事ではないのだろうと、予想とも諦めとも取れるものはあった。更にアニエスを通りを外れて路地に入り、裏通りにある小さなドアの前で足を止めると、私の予想は確信へと変わる。

アニエスはドアを三回ノックして、一拍間を置いてから二回叩き、また間を置いて三回叩く。すると内側から小さな覗き窓が開いて、

「何の用だ」

しわがれた男の声は気難しい響きを含んでいたが、アニエスは構わず、

「先日、とても綺麗な花を見つけて来たと聞いたけれど」

「ああ、シテ島の花市でな」

「でも、もっと綺麗な花があるわよ」

「そんなわけがあるか」

「あら、見もしないうちから否定するってことは、そんなに自分の花に自信がないの？」

「言ったな。なら見せてみる」

鍵が開く音がして、ドアが開かれる。

ドアを開けたのは小柄で腰が曲がり、薄い頭髮と張りだした額が特徴的な老人で、挨拶もせず、首を動かすだけで私達に中へ入るよう促すと、アニエスも何も言わずに中へ入っていくので私も仕方なく無言で後に続く。ドアの鍵を幾つも掛けてから、老人は私達を先導して歩き出す。薄暗い廊下を進んで通された部屋は、花どころか粗末な机と椅子二つしか調度らしきものが無く、まるで警察の取調室のようで、雨戸が閉まっているのが息苦しさに拍車を掛けていた。老人がその椅子の一つに腰掛け、アニエスが机を挟んで老人の対面に座ると、必然的に私はアニエスの横に立つことになる。

「いつものでかい男じゃなく、神父なんぞ連れてくるとは何の酔狂かな？ 紅のお嬢^{ホシ}」

訝しげに私の顔を見上げて尋ねる老人に、

「心配ないわ、そいつは私の下僕だから。それより早く本題に入りましょう」

アニエスの答えに、完全には納得しきれないようだったが、老人は「ふむ」と頷き、

「で、今日はどんな花を持ってきたのかな？」

そう尋ねる老人に、アニエスはポシェットの蓋を開け、無造作に手をつっ込む。手を抜き出し、机の上まで持って行って開くと、色とりどりの宝石が机に転がる。

何故花を求められているのに宝石なんかと困惑する私をよそに、老人はその一つを手に取り、ルーペでつぶさに観察する。様々な角

度から注意深く見ると、その宝石を机に置き、次の宝石を取って同じように観察する。そうして全ての宝石を無言のうちに見終わると、老人はフウツと一息吐いて口を開く。

「今回もまた、随分とヤバいのを持ってきたもんだね。捌く方のことも考えて欲しいよ」

意味ありげに机の上の宝石に目を落としながらばやく老人とは対称的に、アニエスは軽い口調で、

「あら、宝石なら研磨^{カット}すれば、出所はどうとでも誤魔化せるでしょう？」

「簡単に言わないでくれ。手間賃は掛かるし、削れば小さくなってその分石の値段が落ちるんだぞ」

「職人の腕の腕次第で値の落ち幅は小さくなるし、場合によっては高くもなるでしょう？」

「その職人の腕が安くないんだ。研磨の出来を決めるのは、一に時間、二に道具、三に知識、最後に経験で、後の二つは一朝一夕でどうなるもんじゃない。何度も言ってるだろう？」

その後も二人のやり取りは続き、アニエスが出した宝石をいくらかで買うか値段交渉に入るが、ここまでの話を聞いただけで、老人の素性を推測するには十分だった。

しばらくして値段の折り合いが付くと、老人は椅子を立ち、そのまま部屋を出て行く。

「アニエス、もしかしてこの人は故買屋なのか？」

ドアが閉まってすぐ、アニエスに尋ねると、

「ええ、そう。最初に花がどうしたというやり取りは、ヤバい物を引き取ってという符丁よ」

思いの外あっさりと、今更気付いたのと言うように答えてくる。

「じゃあ、この宝石は……」

「ええ、この前石炭を頂くついでに持ってきた物よ」

言われてみれば、あの時アニエスに見せられて覚えのある宝石ばかりだったことに気付く。

「どうせ放って置いてても瓦礫の山に埋もれたままか、掘り出されても警察とかに押収されてずっと保管されるのがオチなんだから、こうして市場に出した方がよっぽど世の中のためになるし、私もお金が入って全てが丸く収まるじゃない？」

「市場は市場でも、裏市場じゃないのか？」

「だから何？」

全く悪びれないアニエスの態度に、返す言葉を見つけれずにいると、再び老人が部屋に入ってくる。

「確かめてくれ」

老人が札束を机の上に置くと、アニエスは一つ一つ手に取り、手早くチェックする。

「確かに、間違いないわ」

全てチェックし終わると、アニエスは札束を無造作にポシエツトに突っ込んでいく。

「今度はもう少し捌きやすい物を持ってきてくれ」

札束と一緒に持ってきていたケースに宝石を移しながら言う老人に、

「ヤバくない物だったら、あなたの所になんて持ち込まないわよ」

アニエスが即座に言い返すと、老人は不機嫌そうにフンと鼻を鳴らす、

「そう言えば、先日こいつとは別の意味でヤバい物が出たという話を小耳に挟んだんだが、お嬢なら好みじゃないかな？」

ふとそんなことを言うと、老人は意味ありげにアニエスを見る。

「へえ」

興味を引かれたらしく、アニエスは先程の札束の一つをポシエツトから出すと、そこから数枚引き抜く。

「詳しく聞かせてくれるかしら？」

机の上を滑る紙幣に手を乗せ、老人はニヤリと口の端を吊り上げた。

アニエスの商談が終わると、私はまた彼女に連れられ、地下鉄^{メトロ}に乗る。

パリまでの道のりと言い、着いてからと言い、アニエスの行動には全く迷いがないので、私は地下鉄の車内でアニエスに尋ねてみる。

「随分慣れた感じでパリの町を歩いてるが、土地勘があるのか？」

「少しね。今の家に引っ越す前、ちよつとの間いたから」

「中華街に住んでいたのか？」

「ローラン、あなたも中国系はみんな中華街に住んでると思ってるの？」

「済まない、偏見だった」

立っている私の前で座席に座ったアニエスに、上目遣いで睨まれ、私は即座に謝る。

「分かればいいのよ。それでね、パリにいた間は市内のホテルに泊まってたんだけど、私が東洋人で、おまけに子供だから、従業員が腹の中では舐めてるのが見え見えなのよ。まあ流石に表面上は丁寧に扱ってくるから文句は言わなかったけど、ある日そのホテルのレストランで夕食を取っていて、デザートに前日の残り物のケーキが出てきた時には、給仕^{ギャルソン}を呼びつけて、更には厨房まで乗り込んだわ。ここのレストランは民族で客に出す料理を変えるの？　ってね」

この時私の脳裏には、アニエスがそのレストランの厨房に怒鳴り込み、自分に出されたケーキが他の客のケーキと比べてどれだけ作られてから時間が経っているかを正確に言い当て、スタッフがぐうの音も出ない状況に追い込まれた光景がありありと浮かんた。彼女の感覚は常人より遥かに鋭敏で、それは嗅覚、味覚も例外ではなく、下手な食通など及びも付かない。以前彼女の家で昼食に同席した際、アニエスが料理の塩加減と火を通した時間が氣候に合わなくて僅か

に味が落ちているとロベールを叱責したので、私が流石にそこまで神経質にすることはないだろうと言ったら、彼女は即座にこう言い返した。

「ロベールならその位の微調整はできると知ってるから言ってるのよ。あなたから見れば単なる日常の食事でも、ここで食べる、この日の夕食は、悠久の時の流れでたった一度しかないの。この重要性が分かる？」

刺すように向けられた彼女の指と言葉に、私はすぐに答えを返せなかった。

「そのうちホテルの支配人がやって来たけど、事情を知ると顔を真っ青にしちゃって、その様と来たらまるで喜劇役者みたいでね。最後は私に向かって平謝りしながらお金の入った封筒を出してきたわ」「受け取ったのかい？」

アニエスは首を横に振る。

「突っ返してやったわよ。そんな封筒に入れられる程度の金額で詫びになんてさせてたまるもんですか。ついでに言っちゃったわ。『スタッフをクビにする責任の取り方も許さない。いつかまた来た時、今日と同じ人達がどう私をもてなすかどうかで、今日の責任を取ったか否かが決まるのよ』ってね」

「『いつか』って、いつ行くつもりなんだ？」

私がそう尋ねると、

「さあ、いつにしようかしら？　今はまだホテルの人達も私のことを覚えていてでしょうし、一年後でも忘れてないかも知れないわね。一〇年か二〇年、いいえ、いっそ三〇年くらいして、私の姿が今より大きく様変わりしてから行こうかしら？」

電車の窓に顔を向け、窓ガラス越しに次々と通り過ぎる地下道の明かりを見ながらアニエスが答える。そんな彼女の窓ガラスに映った表情は、意地の悪い笑みを浮かべていた。

やがて目的の駅に到着すると、彼女は電車を降りて地上に上がり、後に続く私も階段を上がると高みにそびえるサクレ・クール寺院を見上げる。

パリ一八区は三世紀、パリの初代司教である聖ドニサン・ドニが斬首刑に処されたとされる殉教者モンマルトルの丘のある場所として知られ、二〇世紀初めにはピカソやモディリアーニ達が安アパートに住み、コクトー、マティスらが出入りして芸術論を交わしたという。しかし、そんな芸術の中心地もこの頃から既に観光地へと変貌しており、日々多くの観光客がテルトル広場、サクレ・クール寺院、ムーラン・ルージュを目当てに集まっていた。

アニエスが足を向けたのは、そんなモンマルトルから外れた場所にある菓子屋で、外から見ると本屋や薬屋などに並んでひっそりと言った感じの店構えをしていた。

「いらっしやいませ」

アニエスが店のドアを開けると、カウンターに立つふくよかな丸顔が特徴的な老女が愛想良く声を掛けてくる。

「マドレーヌ二つちょうだい。ローラン、あなたも食べるわよね？」

即座に注文するアニエス。台詞の後半は私に対する確認と言うより、「一緒に食べなさい」という方がむしろ近く、私も小腹が空いていたから「ああウイ」と返事する。

「あと、店の中に食べる所はあるかしら？」

続けてアニエスが尋ねると、

「はい、こちらにございますよ」

老女が店の奥にこぢんまりと置かれたカフェスペースを示すと、「じゃあ、お茶も一緒にお願ひ」とアニエスはそちらへ向かう。カフェスペースと言っても、机が一つとそれを挟むように椅子が二つ置かれただけで、アニエスが片方の椅子に座ると、私も反対側に腰を下ろす。

「お待たせしました」

間もなく老女がトレーにマドレーヌとティーセットを二人分ずつ

乗せてやって来る。そしてマドレーヌを出し、私達の目の前で紅茶を入れると、ふわりとした香りが私達の鼻をくすぐる。

フランスでは美味しい菓子屋は教会の近くにあると良く言われる。日曜日、教会でミサを終えた人達が、帰りに昼食のデザートを買うために菓子屋へ寄るのが昔ながらの習慣で、私も子供の頃はその時に買って貰うケーキや焼き菓子が楽しみだったものだ。

そのため教会からいささか距離がある上に、言っては悪いが店構えも地味なこの店の菓子には過大な期待を抱いていなかったが、紅茶で口を湿し、マドレーヌを一口した瞬間、それが間違いだったことに気付く。

マドレーヌは無塩バター、小麦粉、卵、砂糖、ベーキングパウダー、好みによってバニラエッセンスやブランデーを混ぜ合わせ、型に入れて焼くと言う具合に、作り方は至ってシンプルだ。だがそれだけに小細工が効かず、材料の質や作る者の技量が問われると言っただけだろう。だからあのマドレーヌを初めて口に入れた瞬間、私の味覚と嗅覚に飛び込んできたバターの風味の豊かさを、一体どう表現したものだろうか。外は程良い固さに、中はふんわり、しつとりと焼き上げられた生地の歯触りを、その後に訪れた上品な甘味を、それらに埋没せず且つ主張しすぎないバニラエッセンスのほのかな香りを、思いつく限りの表現を尽くしても伝えきれそうにない私の文才の乏しさがもどかしい。私は聖職者であって小説家でないということなど、虚しい言い訳に過ぎない。

とにかく、私がそのマドレーヌの予想外の美味しさに呆然としていた間、アニエスは悠然と自分の分を食べ終え、紅茶を一口すると店主の老女を呼びつけ、

「良い材料使ってるわね。それでいて材料だけに頼ってないようだし。フィリップ爺が薦めただけのことはあるわ」

素直に褒める――すなわち、アニエスの最高評価だ――アニエスに、老女も余計なことは一切言わず「ありがとうございます」とだけ返す。

「追加で夕食のデザート用にケーキを二つか三つ見繕ってくれるかしら。ここへ来る前にフィリップ爺から聞いたんだけど、この間調理の難しそうな材料を仕入れたんですってね？」

そうアニエスが言った途端、それまで柔和な笑みを浮かべていた老女の表情に陰りが入る。

「持て余してようだったら、私が引き取っても良いわよ」

続けてアニエスが言うと、老女の表情から完全に笑みは消え、

「お嬢ちゃん、世の中欲をかきすぎると、それに足をすくわれて奈落の底へ真っ逆さまというのは良くあることよ。あと、子供だからと言って許して貰えることと、そうでないことがあるということも覚えておきなさい」

口調こそ優しいが、厳しく諭すように老女は言う。

「ご忠告ありがとうございます」

老女の言葉にアニエスはそう前置きした上で、

「でも、“故買屋”フィリップが“この世界”にちよつと足を踏み込んで調子に乗っているだけの小娘に、あなたさえ手こずるような物の話を振るような人だとあなたは思っているのかしら、“徴の”マティルダ？」

アニエスの質問に、パリの裏社会でその名を知られる魔道師——私も少し後にそれを知ることになる——マティルダは額の皺を更に深くして数秒間沈黙した後、若い男の店員にカウンターを任せて店の奥へと引込む。

「アニエス、年長者に対してあの言い方は失礼じゃないか？」

声を潜めて言う私に、

「あら、これでも礼は弁えたつもりだけどしれつと答えるアニエス。」

「だったら私にもそれなりの敬意を払って欲しいものだが」

私の要求は至極正当なつもりだったが、

「そんな台詞は敬意を払われるにふさわしい実力を付けてから言いなさい」

即座にアニエスに却下され、額を指で弾かれる。

そうしているとマティルダは戻ってくるが、先程と同じ気の進まなそうな表情のまま、ジュエリーケースらしき物をそっとテーブルの上に置く。

ジュエリーケースらしき物、と表現したのは、紙テープが1本ずつ、ケースを縦と横に一周して、上から見ると十字に見える。だがどちらの紙テープにもびっしりと細かい文字や紋様が描き込まれていて、どう見てもキリスト教とは無関係そうだった。そして箱の中から何やら禍々しい気配が外へ漏れ出して来るのが見えたが、何か見えない壁があるかのようにそれは止まっており、どうやらあの紙テープに描かれた物が、ケースから気配が外へ広がるのを防いでいるようだった。息を吞んでそれを見ている私に、

「ほう、神父様もこれの恐ろしさが分かりますか」

さもあらんと言うようにマティルダは頷く。

「これはね、最初の持ち主が戦争で殺されて、その後持ち主が次々と事故や病気で死んでいったという曰く付きのダイヤモンドだね。そういう『曰く』は良くある話なんだけど、これは最初の持ち主の未練がよほど強かったらしくて本物の呪いが憑いちゃったのよ。で、その後も持ち主の未練や悲しみとかを吸収してどんどん呪いが強くなっちゃって、私でも封印した上で少しずつ浄化していった方が良いと判断したくらいなもの。あなたみたいな小さい子が、下手に手を出して崇られるのなんて、見たくないからおやめなさい」

そう話して聞かせるマティルダの表情に、面白がらせたり怖がらせたりする様子はなく、真剣にアニエスを思い留まらせようとするのがはっきりと見て取れた。だがアニエスはマティルダの忠告も真面目に聞いていたのかいなかったのか、静電気でも確かめるかのように数回指先をケースに近づけては引っ込める動作を繰り返し、

「なるほどね」

そう一言呟いて、サッとケースを掴み取る。そして椅子を立つと、カウンターに用意されたケーキの箱を取って代金を払い、「ごちそ

うさま」と店を出て行く。

「おい、アニエス」

マティルダにアニエスの非礼を一言詫びて、私も続いて店を出ると、前を歩くアニエスに声を掛ける。

「何？」

振り向きもせずに戻してくるアニエスに、

「それがどれだけ危険な物か、私にだって分かったんだ。君に分からないわけないだろう？」

「もちろん。だからタダで手に入るんじゃないのよ」

私の問いかけに、アニエスは当たり前のように即答する。

「タダでって、それで危ない目に遭ったらどうするんだ？　どんなに金を積んでも買えない物はあるんだぞ、例えば命とか——」

「危険だからメリットも大きいのよ。それに、人の心配してる暇があったら、自分の身の心配をしたらどう？」

「えっ？」

いきなり予想外の方向に話を振られて困惑する私に、アニエスは更に続けて言った。

「この宝石は、あなたが浄化するのよ。ローラン」

「いらっしやいませ、神父様」

パリから帰って翌日の午後、アニエスの家を訪れた私を、いつものようにロベールが迎え入れる。

「失礼ですが、その鞆は？」

今回私が右手に提げて持参した鞆に目を止め、ロベールが尋ねる。

「ええ、ちょっとした準備をね……」

言葉を濁しつつ、応接間に通されると、アニエスがソファアーに座って待っており、

「何、その鞆は？」

予想していた通り、鞆に目を止めて訝しげに尋ねる。

「いや、悪霊祓いというから、こちらもそれ相応の準備をしておこうと思って……」

通常、悪霊・悪魔祓いを行うには、祓いを求める人間に悪魔や悪霊の類が本当に憑いていることを立証した上で、教会の長上——私の場合は教区の司教の許可を貰い、定められた規則と典礼に則って慎重に進めなくてはならないのだが、アニエスにそれを言った所で素直に納得してくれるとは思えなかったし、今回は祓うのが人間ではなく宝石で、名目上は聖別ということにすれば司教の許可は必要ない。とは言え非常に危険が伴うことには違いないからできる限りの準備をしてきたのだった。

「祭服、頸垂^{ストラ}帯、十字架、聖香油、聖水、散水器、祈祷書——悪魔^{エクソ}祓いに必要な道具は一通り持ってきた」

鞆を開けて中身を見せると、アニエスは「ふうん」と気の抜けた声で見えていたが、

「けど、これらを使って本当に悪霊や悪魔を退治したことはないんでしょう？」

「まあ、無理に追い払わなければならぬほど質の悪い霊には遭わ

なかったし、悪魔の方は実際に見たことは一度もなかったから……」
アニエスの問いに私が答えると、アニエスは「やっぱりね」と呆れたように言う。それからアニエスは私に向かって背を向け、ソファの後ろに手を伸ばすと、一振りの鞘に収まったサーベルを掴んでくる。

「はい」

そのまま無造作に私に向かって差し出してくるので受け取ると、鞘と柄の造りに私は思わず目を奪われる。黒塗りの鞘は所々金属で補強されているが、金属部分には十字架など精緻な細工が施され、柄に巻かれた白い革、金属製の護拳にも施された細工などによって、儀礼用にも見える流麗さを備えていた。

「柄と鞘のベースは樹齢千年を超える檜の枝から削り出して、柄には多くの漁師やハンターを退けた巨大鮫の革と、高山で想像を絶する風雪と寒さに耐える蛾の繭から取った糸を滑り止めに巻いてあるわ。護拳は錬金術、冶金学の粋を尽くした合金製。そして剣身は、例の隕石の一部を打って作った物よ」

柄を握り刃を抜く。わずか数センチ引き出すだけで、これまで何本も使い潰してきたどのサーベルよりも圧倒的な存在感を感じたのは、短い期間ながら剣を振るってきた経験によるものか、単純に刃の材料となった、宇宙の彼方より飛来した星の欠片が持つ力なのか、その場では判断しかねた。

「あなたは霊が見えるだけで、術を使える才能はないみたいだから、下手に強い力を持った武器を持たせたら、使いこなせないどころか、かえってあなた自身を傷付ける危険があるわ。だからその剣には霊を傷付ける以外の能力は付けてないわ。もっとも、切れ味や耐久性も、これまであなたが使ってきたのとは比べたら段違いだけど」

アニエスの説明を聞くまでもなく、このサーベルが名剣であることは、一目見れば大抵の人が理解できるだろう。それだけに、この剣を振るう際には今まで他の剣を持った時以上に理性と克己心、そして覚悟を必要とするだろうと悟った。

「霊を傷付ける能力を付けた、と言うけど——」

「ええ、普通の武器で霊を倒すことは出来ないけど、その剣には霊に傷を付ける力を込めてあるわ。もちろん使う技量が伴わなければ宝の持ち腐れだから、これからもしっかり修行しなさい」

「そうじゃなくて——」

私はアニエスの言葉を遮って、

「私が教えて欲しいのは、この世に留まっている霊に天国への道を示して昇天させる方法だ。これでは力尽くで脅すか倒すかしかできないじゃないか！」

前々からアニエスに言おうと心中に鬱積していたものは沢山あったが、いざ口に出してみると結局これに尽きた。実際、彼女が修行と称して私を連れ回してやっていたことは、人間か動物を相手に大立ち回りが大半で、体力と剣の技量は身についたが、私が期待していたことは何一つ教えてくれなかった。

「ええ、その通りよ。私達の世界はまず相手を倒せる実力がなければ始まらないのよ」

だがアニエスはそれを詫びるどころか私の言葉を否定もせず、それどころかこのように過激な答えを返して来た。

「この世に留まっている霊というのは、大概生きている人間以上に執着心が強くて——て言うか、執着心の強い霊ほどこの世に留まりやすいものなのよ。だから話し合いで昇天して貰おうとしても簡単に納得しては貰えないし、下手すると襲ってくることさえあるわ。従って霊から身を守るための実力、武装は必須なの」

アニエスは続けてそう説明してくるが、

「だから、身を守るためにこれらがあるんだ」

私は完全には納得できず、持参した悪魔祓いの道具を示す。聖職者として、武器で相手を威嚇しながら話すことなどあってはならないと、年月を経た今でも思うが、あの時はアニエスを相手にいささかムキになっていたことは否定できないと懺悔しよう。それだけに、この直後のアニエスの言葉はあまりに意外で拍子抜けになったもの

だ。

「なら、あなたのやりたいようにやってみれば良いわ」

その後、私達は二階へ上がり、真ん中に簡素な机とテーブルが置かれただけの部屋に通される。

「ここなら何が起こっても被害は最小限で抑えられるし、好きなようにやってみなさい」

机の上に例の呪われたダイヤモンドが入っているというジュエリーケースを置いてアニエスは言う、ロベールと一緒に部屋の隅へ移動する。

私はいつもの僧服カソックの上に祭服を着て、頸垂帯を首に掛けた儀礼用の服装で鎮くと、聖水を撒いて部屋を清める。

「主あわれみ給え。」

キリストあわれみ給え。

主あわれみ給え。

キリストわれらの祈りを聴き給え。

キリストわれらの祈りを聴き容れ給え。

天主なる御父、われらをあわれみ給え。

天主にして世のあがない主なる御子、われらをあわれみ給え。

唯一の天主なる聖三位、われらをあわれみ給え……」

祈祷書を開き、連禱を唱える。

「神よ、願わくは汝の名によりて我を救い、汝の力もて我を裁き給え。」

神よ、我が祈りを聞き給え、我が口の言葉に耳を傾け給え……」

次いでダビデの詩とされる旧聖約書の詩編五四編を読み、神の加護を祈り、神への感謝を捧げる、更に神の恩寵を嘆願する誓言をする。この後通常の悪魔祓いの手順通り、憑いている悪魔に退散勧告を行い、新約聖書ヨハネによる福音書一章四節を読み上げるが、ここまででは何の反応もなく、アニエスも黙って見ている。

だが、ジュエリーケースから漏れ出す悪しき気配も止む気配が見

えなかったので、私は右手で十字を切ると、頸垂帯の一方の端をケースに巻き付けようとする。

途端、頸垂帯が見えない力で弾かれ、私も押されて床に尻餅をつく。そして見上げる私の目の前で、ケースは中で何かが動いているようにカタカタと動き出し、次第に激しくなっていくと、ケースに縦横に巻き付けられていた紙テープが、まるで伸びきったゴムが切れるようにバチンと激しい音を立てて、二本とも同時に切れる。次の瞬間、ケースの蓋が勢い良く開き、中に入っていたダイヤモンドの指輪が露わになると、そこから膨大な、どす黒い霧のようなものが噴き出してくる。人間の負の感情に色を付けたらこうなるのだとは思えるそれを、私の豊富とは言えない語彙の中から呼称するとしたら、瘴氣しょうきという名前が最もふさわしかった。

瘴氣は凝集すると人型を形作り、豪華なドレスに身を包んだ、いかにも身分の高そうな婦人の姿になる。だがそのドレスは傷や出血だらけ、表情は怒りや憎しみの形相に歪んでおり、
『痛い……苦しい……ああ、何故妾わらわがこのような目に遭わねばならぬ……』

血の滴る唇から、絞り出すように恨みの言葉を吐いてくるそれはまさしく霊——それも悪霊と呼ばれるものに違いないと、立ち上がることも忘れて私が確信していると、悪霊も私に気付いて、

『貴様にも、妾と同じ苦しみを味わわせてくれよう！』

叫びながら手を伸ばしてくる悪霊に対し、私はロザリオを掲げ、
『我、汝を祓う！ 汝、最も下劣なる霊よ、我らが敵の具現化よ、全き亡霊よ、我その軍勢の全てを祓う、イエス・キリストの御名によりて——グハッ！』

エクソシズムの言葉を唱える途中で私は見えない力に殴り飛ばされ、ドアに背中から叩き付けられる。

「ゴホッ……何故祈りが通じないんだ……」

床にずり落ち、咳き込む私に、アニエスは『ああ、やっぱり』という表情で私を見て、

「だからマティルダが言ってたでしょう、下手に手を出したら祟られるって。聖水や祈り程度じゃ無駄に向こうを刺激するだけよ。それにしても封印を破っちゃうなんてね」

感心と呆れの混ざった口調で言ってくるアニエス。状況を分かっているのか疑いたくなる程、他人事のような態度の彼女に、

「何を言ってるんだ、悪霊や悪魔が相手なら、尚更祈りで立ち向かうべきじゃないか！」

聖職者として祈りを否定されるわけにはいかなかったので、私は言い返す。だが、

「祈って必ず奇跡が起こるなら、それはもう奇跡なんて呼ばないわよ」

アニエスは冷たく即答し、

「仮に奇跡というものがあつたとしても、最初から神様に奇跡をお願いする奴なんて、私が神様でも助けないわね。自分にできる限りのことをやり尽くして、それでも駄目で祈る人の元に舞い降りるからこそ、奇跡は有難味があるのよ」

そう言いながら、先程のサーベルを差し出してくる。

（ああ、彼女は始めから、こうなると予想していたのか——）

聖職者として、できる限りの手段で霊を昇天させようと試みたつもりが、結局はアニエスの掌の上で踊らされていたことに、不甲斐なさで齒噛みしつつ、私はサーベルを握む。

『痛い……苦しい……苦しめ……皆苦しめ……』

呪詛の言葉を垂れ流しながら、ゆっくりと近付いてくる悪霊に、私は再び正面から対峙する。

「めでたし聖寵充ち満てるマリア、主御身とともにまします。御身は女の内にて祝せられ、御胎内の御子イエズスも祝せられ給う——」

鞘に収められたサーベルを腰の左に回し、右手で柄を握りつつ、私は天使祝詞を唱える。アヴェ・マリア 霊とは言え、他人を傷付ける罪の許しを神に請い、聖母に取り成しを願う中で、先程まで乱れていた私の心は平静を取り戻していく。

『死ね……死ね……皆死んでしまえ……』

一方悪霊はうわごとのように呪詛を零しつつ、私に向かって右手を伸ばしてくる。

「天主の御母聖マリア、罪人なる我らのために、今も臨終の時も祈り給え。アーメン——」

最後の『アーメン』と同時に、私はサーベルを抜き放ち、悪霊を右脇から左肩にかけて斜めに斬り上げる。

『ギャアアアアアアッ!!』

ダンテの『神曲』に登場した、地獄の罪人もかくやと思える程に悲痛な叫びを上げ、悪霊は私の喉まであと数センチまで近付いていた両手で傷口を押さえ、悶え苦しむ。

『痛い痛い痛い苦しい苦しい苦しい痛い痛い痛い苦しイタクイタイタクルイタバギレビキアア——』

悪霊は最後にはもはや言葉にならない叫びを上げながら、傷口からみるみる崩れて形を失っていく。やがて先程よりも遥かに薄い瘴気の靄もやと化したかと思うと、すぐに薄くなって完全に消滅する。

そして、後には静寂と、ケースの蓋が開いた時と変わらず、天井からの照明の光を受けて輝くダイヤモンドが残された——

「ああああああ——」

サーベルが手から離れ、固い金属音を立てて床に転がるのも構わず、頭を抱えて悔恨と絶望の声を上げる私に、「何叫んでるのよ?」とアニエスが声を掛けてくる。

「わ、私は、聖職者の身で、霊を滅ぼしてしまった——例え天国へは行けなくても、煉獄か地獄でも、悔い改めれば救われる道もあったのを、この手で、閉ざして——」

自身が犯した罪の重さに、血涙さえ流れそうなのに、涙の一滴も零れぬことが更に私の心を打ちのめす。

「何だ、そんなことなの?」

やれやれと言うように溜息を吐くアニエスに、私は掴みかかる。

「そんなこととは何だ!?　いくら君でも言っただけいいことがあるくらい分かるだろう!」

これ以上彼女の言いたいように言わせていたら、サーベルで彼女に斬りかかってもおかしくないくらい、私の精神は限界まで追い詰められていた。彼女を斬ることなど落ち着いて考えれば不可能なところらうすぐ分かるし、聖職者として大人として、子供相手に激昂して掴みかかることなど普通の精神状態ではあり得なかった。

「落ち着きなさい」

アニエスはいつも通りの口調で私の右腕を掴み、ある一点を親指で強く押すと、私の右腕に激痛が走って思わずアニエスから手を放す。

「あれは人間の霊じゃないわ。思い入れとかお気に入りとか言う言葉があるけど、とにかく最初の持ち主だった人間の感情や心、執着が指輪に残った、いわゆる残留思念——早い話魂の残りカスみたいなものが、その後の持ち主に次から次へと不幸に陥れて、更に残留思念を取り込んであんな形を作る程に力を持ったようね」

アニエスの説明は、この時の私には理解を超えていたので、

「馬鹿な。霊でないのにこれほどの力を持っているなんて、そんなことがあるのか!？」

「あら、人間の執着というものを馬鹿にしちゃいけないわよ。私の修業時代にも、呪いの髪飾りなんて物と関わったことがあってね——」

それからアニエスが語ったことは、この場でなければ長い年月を経て話が膨らんでいった民話か、相手を怖がらせる為に脚色された、出来の悪いホラーとしか思えなかった。

——昔々、ある街の商人にとっても着道楽な夫人がいた。その夫人は国中から珍しい服、綺麗な服を求めただけでなく、装飾品にも大変うるさく、特に釐甲べっこうから作られた、見事な細工の髪飾りがお気に入りだった。ところがいつしか夫の商売が上手くいかなくなり、資金繰りに困った挙げ句、夫人の服や装飾品を手放さなくてはならな

なくなった。夫人はそれを嫌がり、服や装飾品に火を放つと家もろとも全焼し、自身も一緒に焼け死んだという。

「で、焼け跡から、夫人が一番お気に入りだった鼈甲の髪飾りが、奇跡的に焼け残っていたらしいのよ」

だが、その後髪飾りが渡った先はことごとく火事に見舞われ、遂には呪いの髪飾りとして噂が広まり、幾人も経てある小間物商の手に渡ると、小間物商は扱いに困った末、たまたま近くに来ていたアニエスの師匠の元へ髪飾りを持ち込んだそうだ。

「それで、君の師匠はどうしたんだ？」

「小間物商から髪飾りを受け取ると、目の前で二つに割って、火の中に投げ込んだわ。それが一番確実で手っ取り早いからってね」

「そんなことをして、相手は怒らなかったか？」

「もちろん怒ったわ。怒って師匠に髪飾りを無理矢理奪われたと役所に届け出たものだから、役人達が大勢捕まえに来てね。しかも師匠と来たら、そいつらの相手を私一人に押し付けて、おまけに『これも修行のうち』とか言って剣も術も禁じられて、捕まらないように私が必死で戦っているのを、酒と肴を傍らにゲラゲラ笑いながら見物してたのよ。正直あの時は、本気で師匠に殺意を覚えたわ」

以前聞かされた、盗賊の根城に爆発の符を貼り付けた槍を何十本も投げ込んだ話と言い、アニエスの直線的、享乐的な上に、しばしば物事を丸投げする所は、その師匠の影響が多分にあるようだった。「だから私、師匠のようにには絶対ならないと心に決めてるのよ」

一体どこが違うのかと思いつつ、顔に出ないよう苦闘している私の中で、アニエスはケースを手に取り、ダイヤモンドを見て満足げに笑みを浮かべ、

「ほら、この通り呪いは消えたしダイヤモンドの本体も無事よ。あれだけ強い呪いを宿したダイヤなら、私の剣の装飾には申し分ないわ。また一つ、剣の材料が手に入ったし、隕石から作った習作も性能は十分だし、最高の剣を作るのに大きく前進ね」

さも自分の手柄のようにダイヤモンドを見せつけて歓喜するアニ

エス。

（神よ、慈しみ深く私を顧み、豊かな哀れみによって私の咎を許して下さい。悪に染まった私を洗い、罪深い私を清めて下さい。私は自分の過ちを認め、罪は私の目の前にある。私はあなたに罪を犯し、悪を行い、あなたに背いた。あなたが私を裁かれる時、その裁きはいつも正しい――）

私はアニエスを殴りたい衝動を抑え、必死に心の中で祈りを捧げ、許しを請い続けた。

今日に至るまで、私はこうして何度祈り、罪を犯してはまた祈つてを繰り返してきただろうか。人は生まれながらに背負った原罪に加え、生きている限り負の感情を抱き、罪を犯す躰き石が無数に存在する。人々に天国への道を示す聖職者もまた同じ危険にさらされていることから、天国への道がどれほど狭いかわかり知れよう。

その後も私は道に迷った魂に天国への道を示す目的の困難さを思い知ると共に、数え切れない程の命の危機と向かい合い、自身の心と信仰を試されることになるのだが、それらについて語るのは、また後日のことにしよう。

人の多くは自分の目で見たことに、あらゆる判断の重きを置く。

心というものが目に見えない以上、人は相手の美醜や身なりの良し悪し、表に出る態度など、目に見えるものから判断しなくてはならないからだ。だから、相手が判断から外れた事をする「人は見かけによらない」などと言い、私も昔は度々そう口にしたものだ。

だが大概の場合、それは判断に必要な要素が見えていなかっただけで、然るべき見方を身に付けていれば、隠れているものでも見つかるし、逆に漫然と見ているだけでは表に出ても決して見えない。

そういう点で、アニエス・紅ほど年端のいかない少女という自分の外見を利用し尽くした者はなく、相手の見る目のなさや思い違いから来る油断に付け込んで多くの敵を下してきた。そして少数派ながら、彼女が決して油断ならない能力の持ち主だと分かった者も、彼女の限界を見切ったと思った直後、更なる深淵と高みを見せつけられるのが常だった。そうしてアニエスはあの東西冷戦の時代を、組織や国家、イデオロギーなどのしがらみに囚われず、自分の心のままに立ち回って、“星の剣舞姫”の二つ名と共に伝説となったのだ。

当時アニエスの近くにいた一人とされ、なおかつ彼女と過ごした命の危険と隣り合わせの日々で生き延びる為に『見る目』を身に付けていった私自身さえ、アニエスの底を見る事ができたとは言えないし、それ以外の人に対しても、底を完全に見通せるとは断言できない。何しろアニエスの最も近くにいた彼の底さえ、今以て見通せる自信がないのだから。

あの熊の如き巨体と膂力、それとは裏腹な器用さと繊細さ、そし

てアニエスへの絶対的な忠誠心を持った、ロベール・コラフェイス
の――

「こんにちは、神父様」

六月のある日の午後、町の広場で開かれている市場へ買い出しに行く、果物の露店で品定めしていたロベールが私の姿を見付けて挨拶をしてきた。

「やあ、こんにちはロベール」

私も挨拶を返し、露店に山盛りになっている果物を物色に掛かると、

「ああ神父様、今夜食べられるのですからこちらがよろしいですよ」横合いからロベールが、山の中から幾つか取って差し出してきた。「いや、有り難いんだけどロベール、一人じゃそんなに食べられないし、数日分買い出しに来たんでね」

「でしたら明日はこちら、明後日はこちらが、冷蔵庫に入れるのでなければちょうど食べ頃になりますよ」

一つ一つ食べ頃を説明しながら差し出してくるロベール。

「見ただけで熟成具合が分かるのかい？」

内心舌を巻きながら私が尋ねると、

「そりゃ、あのうるさいお嬢ちゃんの食事の面倒を見てたら、自然と目利きになるわよ」

それまで私とロベールのやり取りを黙って見ていた果物屋の女店主がそう口を挟んでくる。

「アニエスのお嬢ちゃんと来たら、生ものの買い置きなんて絶対許さないし、食べ頃を外れた食材を出そうとすればそのロベールさんの足を踏むは蹴り飛ばすは、『あなたの目玉はビー玉なの？』って罵倒するは、本当に容赦ないのよ。この間なんか陶芸家のお兄さんが出していた露店で、コーヒークップやお皿を一つ一つ指差してはボロクソにけなしちゃってね。そのお兄さんも向こう気が強いもんだから、離れてたうちの店まで言い争いの声が聞こえて来て、よくま

あ迫い出されなかったわよ、本当」

中年の女店主は本人がいないのをこれ幸いと、尋ねもしないのにアニエスの事をペラペラと話してくる。

「ご自分の口に入れる物や使う物には徹底的にこだわる方ですから。アニエス様は」

ロベールがそうフォローして、さり気なく話を締めようとするが、「それにしたって、よくあんなワガママなお嬢ちゃん所で働いてるわね。うちの店で品物の目利きや、その手を見た感じだと、あんた料理の腕も良いみたいだし、それ相応のレストランで働いたって良いじゃないのよ。もしかして、借金か何かで縛られてるのかい？」

果物の山の向こうから身を乗り出して尋ねてくる女店主に、ロベールは思わず後ずさり、

「いや、何と言いますか、色々ありまして……」

言葉を濁すロベールに、流石の女店主の迫力をもってしても早期の陥落は難しいかと私が思っていると、いきなり女店主は私の方へ向きを変え、

「ねえ神父様、アニエスのお嬢ちゃんって見た所お金に不自由してないみたいですけど、親はどうしてるのかしら？　神父様はご存じありません？」

まさか裏組織などから宝石を分捕ったりしているとは言えず、「残念ながら、私も彼女の親については良く知らないのですよ」

実際にアニエスから親について聞いた事はなかったので、この返答に嘘はない。

「あらそう、残念」

女店主は溜息を吐くと、新しくやって来た客の相手を始める。

「申し訳ありません神父様、おかげで助かりました」

果物屋を離れると、大きな体を折り曲げてロベールは礼を言う。

「いや、別に良いよロベール。あの果物屋のおばさんは話好きで有名だから。変な噂が立つよりましさ」

「変な噂ですか——もしアニエス様の事で良くない噂が立ったら、アニエス様にどんな事をされるか……」

どれほど恐ろしい仕打ちを想像しているのか、ロベールの顔色が次第に青白くなってくるので、私は話題を変えようと、

「それにしてもロベール、私も彼女と知り合って結構経つけど、一度も彼女の親についての話を聞いた事がないのだけれど、君は何か知ってるかい？」

私の質問に、ロベールは「いいえ」と首を横に振る。

「私が初めてお会いした時点で、既にアニエス様はお一人でしたから」

「それじゃさつき果物屋でも訊かれたけど、何で君はアニエスにあれば献身的に仕えてるんだい？」

あの果物屋でなくても、それは不思議で仕方なかったが、
「まあ、一言では話しきれない事情がありました……」

あの温和なロベールが、そこまで頑として口を割らないのだから、よほど深い事情があるのだろう。それよりも気になるのは、アニエスの素性についてだった。何故あままで自分用の剣を作る事に執着するのか？　いくら異常な程に腕が立つとは言え、年端もいかない少女があちこち飛び回って、親や家族はどうしているのか？　これまでアニエスにあちこち連れ回され、振り回され続けて、生き延びる事と聖職者としての仕事で一杯一杯だったが、こうして彼女自身の事情について考える余裕ができたと言う事は、それだけ『常識』の外の世界に慣らされたという事なのだが、そろそろ流されるだけでなく、自分でもっと考えて行動すべきかも知れなかった。

「それじゃ、今度アニエスの家へ行った時にでも、家族について訊いてみるか」

「知らない」

アニエスは一言で斬り捨てた。

「知らないって——自分の家族なのに、そんな事はないだろう!？」
話したくないならそう言えば良いじゃないか」

食い下がる私に、

「記憶に無いものを、話したいも話したくないもないでしょう?」
振り払うようにアニエスは答えると、続いてこう付け加えた。

「言っておくけど私、聖ペテロより正直者だって自負してるから」

十二使徒の頭にして初代教皇たる聖ペテロは、イスカリオテのユダの裏切りによってユダヤ教の祭司達に捕らえられた主イエス・キリストを助け出そうと裁判の場に忍び込んだ時、周りの者達から三度、イエスと一緒にいた者だと告発され、三度とも「知らない」と嘘を言い、自身もまたイエスを裏切った弱さを泣いたという。その聖ペテロよりも自分は正直者だという発言は、聖職者としての立場から言わせて貰えば不遜以外の何物でもなかったが、曖昧な言い回しで誤魔化そうとせず、知らない、記憶に無いと明言した事は、かえって本当にアニエスが家族の記憶を持っていないと真実味があった。もっともそれはそれで、アニエスが家族の記憶を失っているのか、最初から家族と呼べる人間が居なかったのかという疑問が生まれたが、その時は訊いても答えてくれそうになかったので、黙って話題を締めることにしたのだった。

「さあ、これから剣を作るんだから、余計な事は考えないで、しっかり手伝うのよ」

「あのガキだな。奴らの言ってた特徴と一致する」

「しかし信じられませんか。あんなガキがボスの屋敷に乗り込んで全滅させたなんて……」

「当たり前だ。常識的に考えろ」

「ですが、あの時の生き残りは皆口を揃えてガキにやられたと……」

「爆発のショックで記憶が混乱してるだけだろう。実際にやったのは恐らく、あの一緒に歩いている大男だ」

「確かに、あいつがやったという方が現実味がありますが、それにしたってあいつらとあともう一人、神父の格好をしてたって男だけで三〇人はいたガードが全滅させられたってのはやっぱり……」

「良く見ろ。あの男、ただ普通に歩いているように見えるが、足の運び、目の配りに隙がない。軍人上がりかも知れん」

「それにしたって、たった二人や三人に襲撃を受けてボスの屋敷が吹っ飛ばされたなんて、話に尾ひれが付く事を差し引いたらって、誰も信じませんよ」

「それでも組織のメンツを潰された事に変わりはない。報復しない事には、俺達は裏社会の笑い者だ」

「じゃあ、あいつらの家突き止めて襲撃すると言う事で……」

「ああ。だが最低でも片方は生かして捕らえるんだぞ。残りの神父の格好をした奴の素性と居所を吐かせなきゃならないからな」

照明の落とされた部屋を、炉から吹き上がる炎が照らし、ふいごが炉の中へ送る風の音が響く。

「もっとピッチを上げなさい！ まだ火の温度が足りないわよ！」

炎の色を見ながら、アニエスはふいごを動かすロベールに指示を飛ばす。

流石にアニエスも、剣を作るのにいつものドレス姿では都合が悪

いらしく、丈夫そうなブルゾンとズボンで身を固め、ロベールも同様の服装で作業に就いている。

「良し」

炉が望む温度に達したらしく、アニエスは一言呟くと、

「ローラン、ふいごを代わりなさい！ ロベール、インゴットを持ってきて！」

アニエスから指示が飛び、私は急いでふいごに飛び付くと、代わりにロベールは部屋の隅から金属の塊を持ってくる。例の隕石から精錬したというそれは、大柄なロベールが両腕で抱えなくてはならないほど大きく、ざっと見ても先日私が渡されたサーベルが何本、いや、何十本も作れそうで、それを分割もせず炉の中へ入れようとするアニエスに、

「おい、一体どんな巨大な剣を作る気なんだ！？」

思わず尋ねる私に、

「まあ、全体でロベールの背丈くらいにはなるかしら」
しれっと答えるアニエス。

「君はそんなに大きな剣を使うつもりなのか！？」

「はあ？ 何勘違いしてるの！？」

呆れた口調でアニエスは続けて言う。

「これはロベールのための剣よ。こいつの腕力を生かすには、それなりの大きさと重さがある剣じゃなきゃ。ほら、無駄話してるから炉の温度が落ちてるわよ、さっさとふいごを動かしなさい。全力で！」

ハンマー片手にアニエスがどやしつけてきて、流石にあれで殴られてはたまらないので、私は力一杯ふいごを動かす。まもなく炉の温度が再び戻ったらしく、アニエスの指示でロベールがインゴットを炉の中へ押し込む。

ふいごを動かす私も熱さで汗だくなのに、アニエスは炉の正面に座り、炎の熱をまともに受けて汗が出る側から蒸発していくのに、愚痴の一つも言わず炎とインゴットを真剣な表情でじっと見つめて

いる。しばらくの間、アニエスは無言でその姿勢を続けていたが、突然立ち上がると、

「ロベール、出して！」

アニエスの指示に、ロベールは巨大なペンチで熱されたインゴットを炉から取り出し、金床の上に乗せる。物が物だから普通の大きさでは乗り切らず、特別に用意された大型の金床に乗せられ、灼熱したインゴットを見てアニエスは頷く。

「しっかり抑えてなさい！」

アニエスはロベールにそう命じると、大ハンマーを振り上げて私の理解できない言葉で何事かを唱えながらインゴットに向けて振り下ろす。澄んだ音を立て、火花を散らしながら、アニエスが大ハンマーで叩く度にインゴットは潰され、伸ばされて形を変えていく。

「凄いな。そんなに力を入れているようには見えないのに……」

感嘆の声を上げる私の目の前で、金属はみるみるロベールの背丈くらいの長さに伸ばされ、剣の形を取っていく。

「行くわよ、ロベール！」

アニエスは大ハンマーを手放すと、ロベールと同じ巨大ペンチで金属を挟み、二人で同時に金床から持ち上げる。そして石造りの水槽の上まで持って行くと、水槽に向かってまた何事か呟いた後、

「それっ！」

ペンチが離され金属の端が水の中に落ち、一瞬遅れてロベールもペンチを離して剣全体が水槽に沈められると、次の瞬間水面から猛烈な蒸気としぶきが立ち上る。

「さて――」

水面が落ち着いたのを見計らって、アニエスとロベールの二人がかりで水槽から引き上げられた端は全体的に煤塗れで黒ずんでいるが、見事に長大な大剣の形を為していた。

「良くそんな細腕で、あれだけ大きな塊をここまで加工したものだな」

私が素直に賞賛すると、

「腕力はそんなに必要ないのよ。物の本質を理解して、それに働きかけさえすればね」

たいしたことではないようにアニエスは答える。彼女が大ハンマーを振るっていた時に唱えていた言葉が関係していたのだろうか？ 私が考えていると、

「もつとも、ほとんどの人はその本質が分からなくて、表面的にしか物を理解できないのだけど。ローラン、あなたみたいだね」

続けて言うアニエス。私がいくら考えても無駄だと言っているようにも取れたが、彼女は気にも留めない様子で剣身に目を向ける。

「さあ、これから仕上げに入るわよ。この剣身の全体を磨いてから、柄を取り付けてようやく剣として完成するんだから」

そうアニエスが言った直後、チリリンと鈴の音が部屋に響く。何かと思ひ部屋を見回すと、部屋の出入口の上に吊された鈴が、誰も触れなければ風もないのに鳴っている。

「誰かこの家の敷地内に入ってきたみたいね」

眉をひそめて言うアニエスに、私は尋ねる。

「何故そんな事が分かるんだ？」

「敷地の中に誰かが入ってきたら、あの鈴が鳴るように結界を張っておいたのよ」

「今更だが、本当に君は何でもありだな」

「そうでもないわよ。どんな奴が来てるかどうかまでは分からないし」

アニエスは肩をすくめてみせると、

「そういうわけだからローラン、ロベール、見てきてちょうだい」
当たり前のように命じてくる。

「私はこの剣の仕上げに掛かってるから。——ああ、そうだ」
アニエスは部屋の隅に立てかけてあった私用のサーベルを持ってくる。

「もし招かれざる客だった時の為に、持って行きなさい」
差し出されたサーベルを、抵抗しても結局は無理に受け取らされ

るのは分かっていたので、私はやむなく受け取り、ロベールと一緒に部屋を出る。

「こんな夜遅くに、誰が何の用で来たんだ？」

私は独りごちながら玄関に向かい、ロベールがドアを開けると私も後ろから外を覗き込む。

「「わっ!？」」

ドアが開いた瞬間、目の前にいた黒服の男と鉢合わせて、ロベールと互いに声を上げる。周りにいた黒服達も一瞬驚くが、彼らはすぐ我に返ると持っていた銃火器を向けてくる。

「――!」

ロベールの手が散弾銃の銃身を掴んで目の前の黒服ごとドアの向こうへ押し出すと、私も反射的に外へ飛び出し、サーベルを抜き打ち、散弾銃の銃身を斜め切りにする。

「あいつだ! あいつが例の、神父の格好をした奴だ!」

黒服の一人が私を指差して叫ぶ。連中は私に怨みがあるのかと思っただけ、

「撃てっ!」

外に何台も停められた黒塗りの車の側に控える、リーダーらしき黒服の男から指示が飛び、部下の黒服達が拳銃を撃ってくる。

私は飛んでくる全ての銃弾の弾道を把握すると、可能な限りの動きで避け、避けきれない一発は弾道上にサーベルの刃を向ける。真ん中に刃が当たった銃弾が真つ二つに割れ、自らの回転エネルギーで私の体を逸れる様を見て、

「馬鹿な!？」

「弾丸を避けるなら分かるが、斬っただと?」

黒服達の間には驚きが走る。

以前裏組織のボスの屋敷で最初に成功させた、脳の高速回転とそれによる弾丸斬りを、その後文字通り命懸けの修行によって、私は自分の意志でできるようになっていたが、集中力を限界まで高める

必要があるため長時間の使用はできず、更には体——特に脳への負担が大きいのだ。だからこれで黒服達が恐れを成して退いてくれれば良かったのだが、

「怯むな！ 撃ちまくれば一発くらい当たる！」

リーダーの命令に、黒服達は再び銃口を向け、中にはどこから手に入れたのか自動小銃まであって、全部使用不能にするまで体が持つようにするにはどうするか懸命に考える。

だが、彼らの銃口が火を吹くよりも先に、ロベールが黒服達に迫ってくると、自動小銃を構える黒服に横合いから前蹴りを繰り出し、踵で相手の膝を砕く。地面に崩れた所を、更にロベールはサッカーボールのように頭を蹴り飛ばし、これで意識を刈り取られた黒服は糸の切れた人形のように倒れる。

「や、野郎！」

他の黒服が銃口を向け直すより先に、ロベールは一息で距離を詰め、2人目の脇腹に回し蹴りを叩き込むと、相手は肋骨が折れたのか蹴られた脇腹を押さえてのたうち回る。

「当たったのは爪先だろ？ それで折れるか普通？」

「靴の爪先に鉄板を入れてやがるな！」

「それだけじゃないな」

狼狽する黒服達に、リーダーの黒服が重い口調で言う。

「さっきセルジュの膝を砕いた蹴りと言い、今の回し蹴りと言い、明らかに靴を履いた戦いに慣れた蹴り方だった。貴様——サバット使いだな？」

「——ちよつと見ただけでそこまで分かるとは、詳しいんですね」

意外そうにロベールは答える。それは遠回しな肯定を意味した。

サバットは私もどんなものかさわり程度ながら知っていた。元はパリのならず者達の間で喧嘩のために使われていた技だったが、ブルボン朝時代に体系化され、上流階級の護身術として広まり、後に競技化された格闘技で、靴を履いていることを前提とした、足首から先を使う蹴り技が多いのが特徴だという。

「まあな。ついでにサバットの弱点も知ってるぞ」

リーダーはフンと鼻を鳴らして続ける。

「サバットは蹴り技が多い分、手技とかが少なくて比較的接近戦に弱い。特にあいつは体がデカくて手足のリーチが長いから、懐に入ってしまえばこちらのものだ！」

「そういうことなら任せてくれ！」

リーダーの言葉に、黒服の中で一番小柄な男がナイフを抜いてロベールに突っ込むと、繰り出される蹴りと腕をかくぐり、懐に飛び込む。だがナイフの切っ先がロベールの腹に届く直前、ナイフを握った腕を掴まれると、足を払われて黒服は綺麗に一回転。

「がはっ！」

背中から勢い良く地面に叩き付けられた黒服が、脳震盪を起こしたか白目を剥いてピクピクと痙攣する。

「生憎、スポーツでサバットはやってないものでして」

失神した黒服を一瞥して、ロベールはリーダーに向かって言う。

「投げだど……まさか……」

リーダーの表情から余裕が完全に消える。

「古式のサバットは、打撃だけでなく、相手と密着した時の投げ技もある総合格闘技だったそうだが……まさか……」

上擦った声でリーダーが言うと、ロベールは無言で一步踏み出して肯定の意を示す。

「さあ、神父様。アニエス様が痺れを切らして出てくる前に、こいつらを全員叩き出しましょう」

普段来客を迎える時と同じだが、それだけに怖いくらい清々しい笑顔で、ロベールは私に言ってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3412q/>

星の剣舞姫

2011年10月5日03時13分発行